

甲第3号の学位を授与された者による博士論文「アタナシオス神学における神論と救済論の関係についての考察」の公表については、以下のとおり、標題・目次および2つの章の要約公表を以て行うものとする。

- ・博士論文 標題
- ・博士論文 目次
- ・博士論文 3.4の要約「『アントニオスの生涯』に見るアタナシオスの救済論」(上)
- ・博士論文 3.4の要約「『アントニオスの生涯』に見るアタナシオスの救済論」(下)

アタナシオス神学における
神論と救済論の関係についての考察

安井 聖

目 次

1.序論	8
1.1.本研究の目的と研究史の概観	8
1.2.本研究の方法	14
1.2.1.本研究の構成	14
1.2.2.コンテキストに基づく読解	15
2.アタナシオスの神論の特質——神の善性の理解を巡って	17
2.1.中期プラトン主義とオリゲネスにおける神の善性の理解	17
2.1.1 はじめに	17
2.1.2.中期プラトン主義における神の善性の理解	18
2.1.2.1.プラトンにおける善のイデア	18
2.1.2.2.中期プラトン主義の二類型	20
2.1.2.3.アルキノオスにおける不動の動者である神の善性	21
2.1.2.4.ヌメニオスにおける「善それ自体」である神	25
2.1.3.オリゲネスにおける神の善性の理解	30
2.1.3.1.中期プラトン主義からの影響	30
2.1.3.2.神の善性に基づく経緯	33
2.1.3.3.神の善性と神の義の調和	37
2.1.4.おわりに	41
2.2.『異教徒駁論』における神の善性に基づく自己啓示	43
2.2.1.はじめに	43
2.2.2.『異教徒駁論』の目指しているもの（『異教徒駁論』第1章）	44
2.2.3.神の自己啓示を受け入れない人間の偽り（『異教徒駁論』第2～29章）	46
2.2.3.1.存在しない悪を作り出す人間の偽り（『異教徒駁論』第2～7章）	46
2.2.3.2.目に見える偶像を作り出す人間の偽り（『異教徒駁論』第8～29章）	49
2.2.4.神の善性に基づく自己啓示（『異教徒駁論』第30～47章）	51
2.2.4.1.神を観想する力を与えられている魂（『異教徒駁論』第30～34章）	51

2.2.4.2.被造物の中で働いて神を啓示するロゴス（『異教徒駁論』第35～44章）	55
2.2.4.3.聖書を通して神を啓示するロゴス（『異教徒駁論』第45～46章……）	58
2.2.4.4.神の善性の前で問われる人間の罪責（『異教徒駁論』第47章）	60
2.2.5.おわりに	61
2.3.アタナシオスの『ロゴスの受肉』における神の善性——「死への腐敗」から「神を 観想する生」へと導く善なる神	62
2.3.1.はじめに	62
2.3.2.『ロゴスの受肉』の全体像——神の善性に相応しいロゴスの受肉	62
2.3.2.1.『ロゴスの受肉』が目指しているもの（『ロゴスの受肉』第1章）	62
2.3.2.2.死への腐敗から解放する神の善性（『ロゴスの受肉』第2～10章）	63
2.3.2.3.神を観想する生に導く神の善性（『ロゴスの受肉』第11～55章）	66
2.3.2.3.結び（『ロゴスの受肉』第56～57章）	72
2.3.3.神の善性に基づく人間理解	72
2.3.3.1.『ロゴスの受肉』第7章についてのラウスの理解	72
2.3.3.2.『ロゴスの受肉』第7章の解釈——そのコンテクストに即して	72
2.3.3.3.人間理解を決定付ける神の善性	76
2.3.4.人間の観想を支える神の善性	77
2.3.4.1.『ロゴスの受肉』における人間の観想の重要な役割	77
2.3.4.2.神を観想する生へと促す神の善性	80
2.3.5.おわりに	84
2.4.アタナシオスの『アレイオス派駁論』第3巻第59～67章における神の善性	85
2.4.1.はじめに	85
2.4.2.メイエリングの理解——神の意志と神の存在の同一化による神の意志の永遠性 の論証	86
2.4.2.1.自由意志と必然性とを超越するもの	86
2.4.2.2.自由意志が内包する偶有性と時間性	88
2.4.2.3.神の意志と神の存在の同一化	90
2.4.3.神の意志と御子の同一化による御子の主権性（κυριότης）の論証	91
2.4.3.1.御父の御子との関係と神の被造物との関係の区別	91

2.4.3.2.神の意志と御子の同一化	94
2.4.4.『アレイオス派駁論』第3巻第59～67章における神の善性	99
2.4.4.1.神の父性と神の経綸との関係（その区別と結合）に顕された神の善性	99
2.4.4.1.1.神の父性と結びつく神の善性	99
2.4.4.1.2.神の経綸と結びつく神の善性	102
2.4.4.2.神の生成的な本性に顕された神の善性	105
2.4.4.2.1.神の善性の内実である御父と御子の愛の交わり	105
2.4.4.2.2.経綸を基礎付ける御父と御子の愛の交わり	107
2.4.5.おわりに	109
2.4.6.補遺——『アレイオス派駁論』第3巻の著者問題について	110
2.4.6.1.カンネンギーサーの主張	111
2.4.6.2.カンネンギーサーへの批判と『アレイオス派駁論』の全体像の探求	112
2.4.6.3.まとめ	114
3.アタナシオスの救済論の特質	116
3.1.『異教徒駁論』第30～34章におけるアタナシオスの人間論が意味するもの——ロゴスの受肉による救済が不可欠な人間の現実	116
3.1.1.はじめに	116
3.1.2.『異教徒駁論』全体のコンテクストにおける人間論的論述（『異教徒駁論』第30～34章）の位置づけ	117
3.1.3.理性を持つ魂（『異教徒駁論』第30～32章）	120
3.1.3.1.人間を外側へ、上へと向けさせる理性を持つ魂	120
3.1.3.2.神へと向かわせる理性を持つ魂	124
3.1.4.魂の不死性（『異教徒駁論』第33章）	125
3.1.5.魂の自己浄化による観想（『異教徒駁論』第34章）	128
3.1.5.1.ハミルトンによる鏡の直喩の解釈	128
3.1.5.2.ロゴスを映し出す鏡である魂	132
3.1.6.神の自己啓示の確かさに表されている神の主権性	134
3.1.7.ロゴスの受肉による救済の前提としての人間論	137
3.2.なぜ人間は悔い改めによってでは救われないのか——『ロゴスの受肉』第7章の解	

釈を巡って	139
3.2.1.はじめに	139
3.2.1.1.『異教徒駁論』と『ロゴスの受肉』の救済論における緊張関係	139
3.2.1.1.1.ラウスの解釈	139
3.2.1.1.2.両書の救済論に一体性を見る解釈	140
3.2.1.1.2.1.メイエリング	140
3.2.1.1.2.2.ピーターセン	140
3.2.1.1.2.3.ラウスの解釈についての評価	141
3.2.1.2.本研究の主題と方法	141
3.2.1.2.1.本研究の主題	141
3.2.1.2.2.本研究の方法	142
3.2.2.『ロゴスの受肉』第7章に関するラウスの解釈の問題点	142
3.2.2.1.『ロゴスの受肉』第7章の前後のコンテキストの概観	142
3.2.2.1.1.神の真実性と神の善性のディレンマ	142
3.2.2.1.2.悔い改めによって救われない二つの理由	143
3.2.2.1.3.ロゴスの受肉による救済	144
3.2.2.2.ラウスの解釈の問題点	144
3.2.2.2.1.悔い改めでは救われない第二の理由しか取り上げていないこと	144
3.2.2.2.2.二つの理由の関係を問う必要性	145
3.2.3.メイエリングの解釈	145
3.2.3.1.マルキオン派批判を背景に置いた解釈	145
3.2.3.1.1.マルキオン派批判を背景に置くメイエリングの解釈	146
3.2.3.1.2.神の真実性とは神の首尾一貫性	147
3.2.3.1.3.創造論における神の善性から救済論における神の善性へ	149
3.2.3.1.4.人間のもろさのしるしである悔い改め	151
3.2.3.2.メイエリングの解釈の評価	151
3.2.3.2.1.第一の理由についてのメイエリングの解釈	151
3.2.3.2.2.マルキオン派批判を想定しすぎるものの問題	152
3.2.3.2.3.神の真実性と神の善性の理解に関して	153

3.2.3.2.4.二つの理由の關係に触れていないこと	153
3.2.4.神の主權を顯す神の善性と神の眞実性	153
3.2.4.1.王としての支配を確立する神の善性	154
3.2.4.1.1.『ロゴスの受肉』第3章3節の解釈	154
3.2.4.1.2.神の品位に関わることとして人間を救う神の善性	156
3.2.4.2.神の眞実性とは神の主權を肯定すること	157
3.2.4.2.1.人間を救済するという目的に支配されない神の眞実性	157
3.2.4.2.2.神の眞実性を顯す神の主權	158
3.2.5.なぜ悔い改めによってでは救われないのか	159
3.2.5.1.悔い改めによってでは救われない第一の理由の意味	159
3.2.5.1.1.『ロゴスの受肉』における神の眞実性と神の善性の意味	159
3.2.5.1.2.人間が悔い改めによってでは救われない第一の理由	159
3.2.5.2.悔い改めによってでは救われない二つの理由の關係	159
3.2.5.2.1.第二の理由についてのメイエリングの解釈の問題点	160
3.2.5.2.2.第二の理由についてのラウスの解釈の妥当性	160
3.2.5.2.3.二つの理由の關係	160
3.2.6.滅びの現實を支配する神	161
3.2.6.1.『異教徒駁論』と『ロゴスの受肉』との結びつき	161
3.2.6.1.1.『異教徒駁論』を前提とする『ロゴスの受肉』	161
3.2.6.1.2.人間の觀想の力が顯す主權者なる神の善性	163
3.2.6.2.アタナシオスが理解する人間の滅び	164
3.2.6.2.1.人間は決定論的に滅びに定められているのか	164
3.2.6.2.2.人間の滅びを引き起こす二重の主体	165
3.2.6.2.3.死への絶望から復活の希望へ	166
3.2.6.2.4.滅びの現實をも支配する主權者なる神	169
3.2.7.おわりに——『異教徒駁論』と『ロゴスの受肉』との一体性	169
3.3.『アレイオス派駁論』におけるアタナシオスの救済論	171
3.3.1.『アレイオス派駁論』の救済論研究の方法——聖書講解に基づいた『アレイオス派駁論』の救済論	171

3.3.1.1.はじめに	171
3.3.1.2.聖書講解に基づいた『アレイオス派駁論』の神学	172
3.3.2. 罪と死からの救いの内実である「神の宮とされること」——フィリピの信徒への手紙第2章5～11節の講解（『アレイオス派駁論』第1巻第40～45章）	176
3.3.2.1.聖書講解によるアレイオス派批判	176
3.3.2.2.神の秘義としての罪と死からの救い	177
3.3.2.2.1.神の秘義	177
3.3.2.2.2.罪と死からの救い	179
3.3.2.3.神の宮とされること	182
3.3.3.人間の救済を主導する神——詩編第45篇7～8節の講解（『アレイオス派駁論』第1巻第46～52章）	185
3.3.3.1.キリストの本性は可変か不変か	185
3.3.3.2.キリストに香油が注がれた理由	187
3.3.3.3.キリストの神性と人間の救済との関係	188
3.3.4. 人間の救いに相応しい道である神化——箴言第8章22～25節の講解（『アレイオス派駁論』第2巻第44～82章）	192
3.3.4.1.キリストの本性は創造されたのか	192
3.3.4.2.人間の救済に対する御子の主権性	193
3.3.4.3.人間に真実の利益をもたらす救済の道——神化	196
3.3.5.情念からの解放をもたらすロゴスの受肉——聖書解釈の原理である「聖書の意図」の講解（『アレイオス派駁論』第3巻第26～35章前半）	200
3.3.5.1. 聖書解釈の原理である「聖書の意図」	200
3.3.5.2.「聖書の意図」の持つ救済論的意義——情念からの救い	203
3.3.5.3.「聖書の意図」と響きあうアタナシオスの聖書講解	206
3.4.『アントニオスの生涯』におけるアタナシオスの救済論	208
3.4.1.はじめに	208
3.4.2.『アントニオスの生涯』の著者問題	209
3.4.2.1.アタナシオス著者説に対する疑義	209
3.4.2.2.アタナシオス著者説の真正性	212

3.4.3. 『アントニオスの生涯』において自らの神学を展開するアタナシオス	214
3.4.3.1. 『アントニオスの生涯』の虚像と実像に表されるアタナシオスの神学	214
3.4.3.2. 修道士の理想像——神を観想する生を生きるアントニオス	215
3.4.4. 『アントニオスの生涯』の主題——生涯を貫く悪魔との戦いと、その勝利の秘訣	217
3.4.4.1 『アントニオスの生涯』における悪魔との戦いの概観	217
3.4.4.2 悪魔ではなく神を畏れて生きることの重要性	220
3.4.4.2.1. 悪魔に勝利する秘訣——恐れてはならない	220
3.4.4.2.2. 恐れに打ち勝たせる神の臨在のリアリティ	224
3.4.4.2.3. 畏れるべきは神	228
3.4.4.3. 神からの賜物としての霊の識別	230
3.4.5. 罪の克服	233
3.4.5.1 天への上昇	233
3.4.5.2. 十字架のしるしが意味するもの	234
3.4.5.2.1. 『アントニオスの生涯』における十字架のしるし	234
3.4.5.2.2. 『ロゴスの受肉』における十字架のしるし	236
3.4.5.2.3. 十字架の死の意味——『ロゴスの受肉』第8～9章の解釈	240
3.4.5.2.4. 悪魔との戦いにおける十字架のしるしの力	242
3.4.6. 人間の救いに対する神の主権性	243
3.4.6.1. 『アントニオスの生涯』における救済論の固有性	243
3.4.6.2. 神の主権性に支えられた罪と戦う生活	245
3.4.6.2.1. 罪と向きあわせる神の主権性	245
3.4.6.2.2. 罪と戦う生活の実践を促すアントニオス	246
3.4.6.3. オリゲネスの論じる霊性修行との違い	249
4. 結論	251
参考文献表	269

1. 序論

『アントニオスの生涯』は、アレクサンドレイア教会の主教であり神学者であったアタナシオスの著作であると伝統的に考えられてきた。すなわちアレクサンドレイア派との闘争により計5回アレクサンドレイアからの追放を経験したアタナシオスは、その第3回目の追放期間中に砂漠の修道士たちの共同体のもとに身を寄せていた。その時に修道士たちの強い要望を受けて、アントニオスという偉大な修道士の生涯をアタナシオスが書いた、と考えられてきた²。『アントニオスの生涯』がアタナシオスによって書かれたのであれば、本書においてアントニオスの姿を極めて肯定的に描いているアタナシオス自身の神学的特質をも、そこから読み取ることができるものと思われる。そこで本論文では『アントニオスの生涯』から浮かび上がるアタナシオスの神学がどのようなものであるかを明らかにしたい。

まず議論を進める前提となる考察を行なう。すなわち第一に近年アタナシオス著者説に対してある研究者たちから疑義が呈されたが、これに関する研究史を N.K.K.ングの論述を通して概観し³、アタナシオスが本書の著者であることの真正性を確認する。第二に関川泰寛の研究を手がかりにして⁴、本書が単に史的アントニオスを忠実に記録することだけでなく、アタナシオス自身の神学を積極的に表現することを目指して書かれていることを示す。

以上の考察を踏まえながら、続けて本書に見られるアタナシオスの神学、特にその救済論がどのようなものであるかを論じる。すなわち第一に、人間が生きていく上での根本的な課題が悪魔との戦いにあると本書では論じられており、その戦いに勝利することにこそ人間の救いの実質を見ているアタナシオスの理解を概観したい。第二にそのような悪魔との戦いを支えるものとして、アントニオスは「十字架のしるし」を行なうのであるが、その「十字架のしるし」に含蓄されている神学的理解を、『ロゴスの受肉』の議論をも取り上げながら明らかにしたい。第三に『アントニオスの生涯』に見られる救済論において、神の主権性の強調がその根底に見られることを示したい。

2. 『アントニオスの生涯』の著者問題

2.1. アタナシオス著者説に対する疑義

本書の著者問題については、アタナシオス研究者のングがその研究史を丁寧に解説している。ングによれば、本書が書かれて間もない教父たちの時代においては、アタナシオスとその著者であるとの証言で一致している⁵。例えばアンティオケイアのエヴァグリオスはギリシア語が原著である『アントニオスの生涯』をラテン語に翻訳したが、その表題部に「主教アタナシオスが外国の兄弟たちへ」(Athanasius episcopus ad peregrinos fratres) と書いた⁶。その数年後にヒエロニムスによって書かれた『著名人列伝』の中で、アタナシオスが『アントニオスの生涯』の著者であると繰り返し述べられている⁷。またナジアンゾスのグレゴリオスは 380 年に『講話』の中で、アタナシオスが修道士アントニオスの伝記を編

¹ 本論文は博士学位論文の一部を公表することを目的とするものである(「アタナシオス神学における神論と救済論の関係についての考察」[2019年3月8日、東京神学大学博士(神学)(甲第3号)学位授与、主査：関川泰寛東京神学大学教授、副査：棚村重行東京神学大学名誉教授、副査：土井健司関西学院大学教授])。本論文は博士学位論文の3.4.『アントニオスの生涯』におけるアタナシオスの救済論にあたる内容であり、ここに掲載するために若干内容を整理したものである。

² Cf. J. Quasten, *Patrology*, vol.3, Westminster and Maryland, 1983, p.39, 関川泰寛『アタナシオス神学の研究』教文館, 2006年, pp.114, 412.

³ Cf. Ng, *The Spirituality of Athanasius: A Key for Proper Understanding of this Important Church Father*, Bern, 2001, pp.200-207.

⁴ Cf. 関川, pp.412-441.

⁵ Cf. Ng, pp.200-201.

⁶ Cf. Evagrius, *S. Ahanasii episcopi Alexandrini praefatio* (Patrologiae Cursus Completus, Series Graeca 26), Paris, 1857, col.837.

⁷ Cf. Hieronymus, *De viris illustribus* (Texte und Untersuchungen zur Geschichte der altchristlichen Literatur 14.1) Leipzig, 1896, S.44-45, 53.

集した、と証言した⁸。また著者が知られていない『パコミオスの生涯』の中でも繰り返し、アタナシオスが本書の著者であると述べられている⁹。これらの証言を踏まえつつ、古代の歴史家たち、すなわちルフィヌス（『教会史』）¹⁰、バラディオス（『ラウソス史』）¹¹、ソクラテス（『教会史』）¹²は、『アントニオスの生涯』の著者をアタナシオスと理解し、そのように記述した。その後 19 世紀になるまで、アタナシオスが著者であることを疑う者はなかった¹³。

しかし H. ヴァインガーテンが 19 世紀後半に、『アントニオスの生涯』の伝統的な著者理解を否定し¹⁴、これを H.M. ガトキンが受け入れてさらに精緻に論じた¹⁵。けれども彼らの論拠は脆弱であり、批判に抵抗することはできなかった。すなわちヴァインガーテンのテーゼは、J. マイアー¹⁶によって説得力ある仕方でも反証され、退けられた。その後の K. ホイシ¹⁷、H. ドリース¹⁸、R.T. マイアー¹⁹、G. ミュラー²⁰、R.C. グレック²¹といったアタナシオス研究者たち、またクアステン²²の『教父学』²²においてもアタナシオスが著者であるとする伝統的理解に立った。

ところが『アントニオスの生涯』のシリア語版の研究によって、再びアタナシオスが著者であると理解することについて疑義が投げかけられた。従来から本書のギリシア語版がオリジナルテキストであると見なされてきた。すなわちこれまでにギリシア語版の他に、二種類のラテン語版、コプト語版、アルメニア語版、グルジア語版、古スラブ語版の写本が発見され、校訂されてきたが、それらの内容の類似性を論拠としながら、ほとんどの研究者たちは、それらの各種語版の起源は現存するギリシア語版であると考えてきた。ところがこれら各種語版とは内容において重要な点で異なる二種類のシリア語版、すなわち短いテキストと長いテキストが現存しているが、それらのシリア語版とギリシア語版を比較すると、一方が他方の単なる翻訳ではないことがわかる。つまり両者には同じエピソードが同じ順番で書かれているが、長いシリア語版は、ギリシア語版よりも 50%ほど長い分量となっている。すでに 19 世紀末に F. シュルテスが両者を比較検討する研究を行ない、シリア語版はギリシア語版とは異なる別の起源のテキストによるものであると論じたが²³、この提案は研究者たちによって概して受け入れられることがなかった。

しかし 1980 年に R. ドラゲによる新しいシリア語の批判的校訂が出版されて²⁴、研究者たちはこの問題に注目するようになった。その校訂本の中でドラゲはシリア語版における多数の言語学的な特異性、すなわちその特異な言葉遣いと珍しい構文を指摘した。そしてオリジナルの『アントニオスの生涯』は現存するギリシア語版ではなく、コプト語化されたギリシア語テキストがあったと推測されるのであり、それこそがオリジナルであるとした。というのはアントニオスの死後間もないエジプトの修道士たちの環境は、コプト語とギリシア語の両方が用いられていたと考えられるからである。そしてこの仮説上の失われたテキストはシリア語版にこそ最もよく保存されたが、ギリシア語によって完全に作り直され、短縮された。こうしてドラゲは、『アントニオスの生涯』の著者がヘレニズムの影響を受けたコプト人であり、アタナシオスのようにギリシア語で著述することに熟達した人間ではない、とした²⁵。

⁸ Cf. J. Mossay, *Grégoire de Nazianze. Discours 20-23* (Sources Chrétiennes 270), Paris, 1980, p.118.

⁹ Cf. A.N. Athanassakis, *The Life of Pachomius: Vita Prima Graeca, Texts and Translations*, Missoula, 1975, pp.4,140.

¹⁰ Cf. Rufinus, *Historia Ecclesiastica* (Patrologiae Cursus Completus, Serie Latina 21), Paris, 1849, col.478.

¹¹ Cf. Palladius, *Historia Lausiaca* (Patrologiae Cursus Completus, Series Graeca 34), Paris, 1860, col.1024,1026.

¹² Cf. Socrates, *Historia Ecclesiastica* (Patrologiae Cursus Completus, Series Graeca 67), Paris, 1864, col.136.

¹³ Cf. Ng, p.201.

¹⁴ Cf. Weingarten, “Der Ursprung des Mönchtums im nachconstantinischen Zeitalter”, *Zeitschrift für Kirchengeschichte* 1, 1877, S.545-574.

¹⁵ Cf. Gwatkin, *Studies of Arianism*, Second Edition, Cambridge, 1900, pp.102-107.

¹⁶ Cf. Mayer, “Über Echtheit und Glaubwürdigkeit der dem heiligen Athanasius d. Grossen zugeschriebenen *Vita Antonii*”, *Der Katholik* 55, 1886, S.495-516, 619-636; 56, 1886, S.72-86, 173-193.

¹⁷ Cf. Heussi, *Der Ursprung des Mönchtums*, Tübingen, 1936, S.78-86.

¹⁸ Cf. Dörries, “Die *Vita Antonii* als Geschichtsquelle”, *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen* 14, 1949, S.357-410.

¹⁹ Cf. Meyer, *St. Athanasius: The Life of Antony* (Ancient Christian Writers 10), Westminster, 1950, p.3; idem, “Antony of Egypt, St.”, *New Catholic Encyclopedia*, vol.1, New York, 1967, pp.594-595.

²⁰ Cf. Müller, *Lexicon Athanasianum*, Berlin, 1952.

²¹ Cf. Gregg, *Athanasius: The Life of Antony and the Letter to Marcellinus*, New York, 1980, pp.1-26.

²² Cf. *supra*. n.1.

²³ Cf. F. Schulthess, *Probe einer syrischen Version der Vita St. Antonii*, Diss., Leipzig, 1894, S.14-25.

²⁴ Cf. Draguet, *La vie primitive de S. Antoine conservée en syriaque*, 2 vols. (Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium 417-418), Louvain, 1980.

²⁵ Cf. *Ibid.*, pp.100-112.

ドラゲの仮説は多くの研究者の間で反響を呼んだ。M.テッツは1982年にギリシア語版の『アントニオスの生涯』の中に二つの層があると主張し、現存するアントニオスの伝記は、ツムイスのセラピオンによってより早い時期に編纂されたアントニオスの物語に、アタナシオスが組織神学的な観点から手を加えたものである、とした²⁶。この仮説は、アタナシオスは本書の著者ではなく、一人の編集者に過ぎない、とするものである。またT.D.バーンズは1986年に、『アントニオスの生涯』のオリジナルはコプト語化されたギリシア語版ではなく、コプト語のテキストである、という新たな仮説を提案した。シリア語版こそが失われたオリジナルテキストを正確に再現しているが、ギリシア語の翻訳者は組織的に修正を加えた。そう論じつつバーンズは、アタナシオスがオリジナルの著者である可能性を否定するだけでなく、彼をギリシア語版の校訂者であることさえも拒絶した²⁷。この他にもシリア語版がギリシア語版よりも先行するというドラゲの仮説は、A.ラウス²⁸やP.ブラウン²⁹にも受け入れられた。

2.2.アタナシオス著者説の真正性

これに対してドラゲの仮説は、1988年にL.アブラモウスキーによって³⁰、1989年にR. ロレンツによって³¹批判された。彼らはシリア語版とギリシア語版における並行箇所を比較することによって、シリア語版の方こそギリシア語版の改訂であるとした。彼らはその著作の中で、ギリシア語版をシリア語版に改訂するプロセスにおける六つの大きな傾向が確認できるとした。

①聖人伝らしい装飾についての傾向は、シリア語版の最初の箇所特に観察される。例えばギリシア語版は、子どもであったアントニオスを、両親に従順な少年として描いているが、シリア語版では、アントニオスは両親の教師であり、両親は彼を長老としてあがめていた、としている。これはアントニオスの賢い教師としての伝統的なイメージを、その少年時代に投影した脚色に他ならない。

②シリア語版では古風な表現が用いられることによって、アントニオスの物語がずいぶん昔に起こったかのように表現されている。

③シリア語版では天使たちの実在が強調され、彼らが禁欲修道者たちの真実のモデルとされている。

④シリア語版には哲学的用語や概念を聖書の言葉に翻訳する強い意図があることに気づかされる。それは聖書の引用や引用がシリア語版には280箇所以上見られるが、ギリシア語版では120箇所に満たないからである。もしシリア語版をオリジナルとするなら、ギリシア語版の改訂者はオリジナルテキストから聖書的な言及の多くを削ったということになるが、そのようなことは通例として4世紀の教会において考えられない。

⑤シリア語版はエジプトのことをよく知らない読者のために作られたので、外国の人々、場所、物事のような不慣れなものを取り上げる時、改訂者は読者のためにそれらを省くか丁寧に説明するものと考えられる。この両方の現象がシリア語版にこそ見出される。

⑥シリア語版では4、5世紀のキリスト論論争におけるアンティオケイア学派やネストリウス派の立場を支持する神学的な改訂がなされている。例えば第36章では、マリアについて述べる時に、シリア語版ではギリシア語版に見られる「神を産むお方」というフレーズが省かれているが、これはテオトコス・マリア論がシリアのアンティオケイアにおいて退けられていたことを反映している。

その後ドラゲの仮説は、S.ルーベンソンとD.B.ブラックによっても退けられた。1990年にルーベンソンは、『アントニオスの手紙』を検証し、それと『アントニオスの生涯』とを比較しつつ、『アントニオスの生涯』がアタナシオスの神学、修道士の伝統、聖人伝の文体の間の緊張関係によって特徴付けられていることを示した³²。そして『アントニオスの手紙』

²⁶ Cf. Tez, “Athanasius und die *Vita Antonii*: Literarische und theologische Relationen”, *Zeitschrift für die neutestamentliche Wissenschaft und die Kunde der älteren Kirche* 73, 1982, S.1-30.

²⁷ Cf. Barnes, “Angel of Light or Mystic Initiate? The Problem of the *Life of Antony*”, *Journal of Theological Studies* 37, 1986, pp.353-368.

²⁸ Cf. Louth, “St. Athanasius and Greek *Life of Antony*”, *Journal of Theological Studies* 39, 1988, p.505.

²⁹ Cf. Brown, *The Body and Society: Men, Women, and Sexual Renunciation in Early Christianity*, New York, 1988, p.213.

³⁰ Cf. Abramowski, “Vertritt die syrische Fassung die ursprüngliche Gestalt der *Vita Antonii*?”, *Mélanges Antoine Guillaumont: Contributions à l'étude des christianismes orientaux* (Cahiers d'Orientalisme 20), Genève, 1988, S.47-56.

³¹ Cf. Lorenz, “Die Griechische *Vita Antonii* des Athanasius und ihre syrische Fassung”, *Zeitschrift für Kirchengeschichte* 100, 1989, S.77-84.

³² Cf. Rubenson, *The Letters of St. Antony: Origenist Theology, Monastic Tradition and Making of a Saint*

と『アントニオスの生涯』の神学との間の基本的な調和、またアントニオスとアタナシオスが共有する遺産は、『アントニオスの生涯』の著者がアタナシオスであり、ギリシア語版こそがオリジナルであることを示している、とした³³。その後ブラッケは、ドラゲが言うシリア語版の言語学的な特異性を取り上げ、それらを一つ一つ検証した。そしてドラゲはシリア語の特異性を誇張しているのであり、シリア語版における言語学的な特異性はコプト語の特性によって説明され得るものではない、とした³⁴。そして現存するギリシア語版こそがオリジナルであり、そのギリシア語版の著者がアタナシオスであることを否定する何の理由も見出せない、とした³⁵。

この段階で、アタナシオスを『アントニオスの生涯』の著者とする伝統的な理解が揺ぎないものとなったように思われる。D.W.H.アーノルド³⁶、A.ピーターセン³⁷、G.J.M.バルトリンク³⁸、F.W.ノリス³⁹、C.カンネンギーサー⁴⁰といった最近のアタナシオス研究者たちもアタナシオスが著者であると理解している。

以上のような研究史の展開に基づき、筆者もアタナシオスこそが『アントニオスの生涯』の著者であると考えている。

3. 『アントニオスの生涯』において自らの神学を展開するアタナシオス

3.1. 『アントニオスの生涯』の虚像と実像に表されるアタナシオスの神学

関川は、『アントニオスの生涯』とほぼ同時代にアントニオスに言及し、あるいはアントニオス自身に由来すると思われる四つの史料(『砂漠の師父の言葉』、『ソムイスの司教セラピオンの手紙』、『アントニオスの手紙』、『パコミオスの生涯』)に見られるアントニオス像を取り上げ、それらと『アントニオスの生涯』とを対比しつつ、『アントニオスの生涯』におけるアントニオス像の特色を論じている。

そこで関川は、例えば『砂漠の師父の言葉』と比較しながら、『アントニオスの生涯』の特色を明確している⁴¹。すなわち『砂漠の師父の言葉』のアントニオスが傷つきやすい人間性をはっきりと身に帯びた存在であるのに対して、『アントニオスの生涯』のアントニオスは悪魔の攻撃に対してひるむことのない勝利者である。また『砂漠の師父の言葉』のアントニオスはこの世の不条理に対して神義論的な関心を抱かざるを得ない存在であるのに対して、『アントニオスの生涯』のアントニオスには神義論的な問いはいかなる正当に場も持たない。さらに『砂漠の師父の言葉』のアントニオスは素朴な一人の修道士として倫理的な訓戒を語るが神学的な主張は皆無であるのに対して、『アントニオスの生涯』のアントニオスは神学者であり、正統派主教の同盟者であり、奇跡を行う者にして聖人である。

このように関川は『アントニオスの生涯』におけるアントニオス像が同時代のアントニオス像とは大きく違っていることを指摘して、次のように論じている。

われわれの興味は、何と言っても、『アントニオスの生涯』のアントニオス像に示された「虚像」の背後に立ち現われるアタナシオスの直面したアレクサンドリアのキリスト教世界の実像なのである。換言すれば、アントニオスという「虚像」の向こうにあるスクリーンの像が結ぶ歴史世界である。そこには何より『アントニオスの生涯』の著者であるアタナシオスの姿がある。……このスクリーンに映し出される実像を背景としながら、アタナシオスは知恵の教師でもなく、党派の指導者でもなく、教会政治家でもない「理想の陰修士」を描くのである。いわばアントニオスの「虚像」は、今再びアタナシオスの手を通して、アタナシオス神学のただ中に配置されて実像を結ぶのである。悪魔は繰り返し、この陰修士の天への帰還を妨害するが、それにもかかわらず、神のロゴスが己れの死と復活によって開いて下さった道は約束されているのである。天への上昇の手段は、禁欲的な実践による。禁欲は、享楽や快樂の否定、性と富と食物の断念、孤独なる生活から成り立つ。それらは、いずれも人間の魂と肉体の正しい関係と秩序の回復をめざすものであった。V.A.

(Bibliotheca Historico-Ecclesiastica Lundensis 24), Lund, 1990, pp.132-141,187.

³³ Cf. *Ibid.*

³⁴ Cf. Brakke, "Greek and Syriac Versions of the *Life of Antony*", *Le Muséon* 107, 1994, pp.29-53.

³⁵ Cf. *Ibid.*, p.53.

³⁶ Cf. Arnold, *The Early Episcopal Career of Athanasius of Alexandria* (Christianity and Judaism in Antiquity 6), Notre Dame and London, 1991, p.69.

³⁷ Cf. Pettersen, *Athanasius* (Outstanding Christian Thinkers series), London, 1995.

³⁸ Cf. Bartelink, *Athanasie D'Alexandrie. Vie D'Antoine* (Sources Chrétiennes 400), Paris, 2004, pp.27-35.

³⁹ Cf. Norris, "Antony", *Encyclopedia of the Early Christianity*, vol.1, New York and London, 1997, pp.29-53.

⁴⁰ Cf. Kannengiesser, "Athanasius", *Encyclopedia of the Early Christianity*, vol.1, New York and London, 1997, pp.137-140.

⁴¹ Cf. 関川, pp.415-419.

は、アントニオスという実在した禁欲陰修士から一種の虚像を創造し、それを「理想の陰修士」という虚像として提示しながら、それを再び実在たらしめる試みなのである⁴²。

関川はアタナシオスが、アントニオスの歴史的な実像よりも理想の修道士像を描くことを目的として、『アントニオスの生涯』を書いたと理解する。そしてその理想の修道士像とは、アントニオスが神へと上昇し、性と食物と富を断念し、ロゴスの勝利に支えられて礼拝に生きている姿であるとする⁴³。

3.2.修道士の理想像——神を観想する生を生きるアントニオス

筆者も『アントニオスの生涯』にアタナシオスの神学が強く反映されているとする関川の理解に同意する。アタナシオスは自らの神学を表現するという意図を持ちつつ、本書を書いた。もちろんまったくのフィクションというわけではなく、実在のアントニオスの姿を取り上げながら、そのアントニオスの姿にアタナシオスの考える神の救いに与って生きる人間の姿を見出しつつ、本書が書かれたと考えられる。すなわち、確かに『アントニオスの生涯』は理想の修道士像としてのアントニオスの姿を描くことを目指して書かれているが、まさにアントニオスを理想像として論じている箇所においてすでにアタナシオスの救済論的なモチーフを読み取ることができるのである。

アタナシオスは本書の目的をその冒頭で次のように述べている。

実際わたしにとっても、アントニオスを思い起こすことはそれだけでも非常な益なのです。そしてあなたがたもお聞きになって、この人に驚嘆するとともに、彼の企図に倣いたいとも思っておられることをわたしは存じております。修道士たちにとって、アントニオスの生涯は修行のための充分な型なのでから⁴⁴。

まさにアントニオスは修道士たちにとってのまたとない型であり、本書を読むことによって修道士たちは大きな益を与えられる。これは本書の結論部分でも繰り返して述べられている⁴⁵。しかしアタナシオスはその結論部分において「必要があれば、異教徒たちにも読み聞かせよ」⁴⁶とも述べ、アントニオスの歩みを伝えることが異教徒への伝道にも役立つと論じている。すなわちアントニオスの姿は単なる修道士の型に留まるものではなく、それ以上の意義を有するものと考えられているのである。さらにアタナシオスは次のように語る。

というのも、著作に基づいてでなく、よそものの知恵に基づいてでもなく、何らかの技術のゆえにでもなく、ただひたすら敬神のゆえに、アントニオスは知られるようになったからである。これが神の賜物であることを、誰も否定するまい⁴⁷。

神を敬って生きるアントニオスの姿は、人々を大いに魅了する力を持っていた。だからこそその敬神の姿を通して、アントニオスの名は人々の間で知られるようになったのである。しかもアタナシオスはそのように敬神に生きる力をアントニオスが持っていたということを強調するのではなく、その力が神の賜物であるという点に意義があるのだと考えていた。したがってアントニオスを敬神に生かしている力が神から与えられたものであるならば、そのような力を与えてくださった神の栄光をこそあがめるべきであるし、アントニオスに倣う者にも神が同じように敬神に生きる力を与えてくださると期待すべきである。こうして本書には、単にアントニオスの型に倣えとの勧告があるだけではなく、神がわたしたちにもアントニオスのような生き方を賜物として与えてくださるのだという救済論的な含蓄が込められているのである。

アタナシオスの主要な救済論に関する著作の一つである『ロゴスの受肉』は、死への腐敗からの救いということを主題として論じている⁴⁸。そしてこの書物の中でも『アントニオスの生涯』と同様に、悪魔との戦いが論じられている⁴⁹。すな

⁴² *Ibid.*, pp.426-427.

⁴³ Cf. *Ibid.*, pp.427-434.

⁴⁴ 『アントニオスの生涯』プロローグ3節（引用は戸田聡訳『砂漠に引きこもった人々——キリスト教聖人伝選集』，教文館，2016年）を使った。ただし Bartelink を参照して一部変更した）。

⁴⁵ Cf. 『アントニオスの生涯』第94章1節。

⁴⁶ 『アントニオスの生涯』第94章2節。

⁴⁷ 『アントニオスの生涯』第93章4節。

⁴⁸ Cf. 拙稿「アタナシオスの『言(ロゴス)の受肉』における神の善性(上)——「死への腐敗」から「神を観想する生」へと導く善なる神」『キリスト教学』(立教大学キリスト教学会)第49号, 2007年, pp.125-139; 同「アタナシオスの『言

わちロゴスの受肉がもたらした死への腐敗からの解放という神の救いの現実を証言する事例として、悪魔の無力化が論じられているのである。『アントニオスの生涯』では『ロゴスの受肉』以上に、人間の根本的な課題としての悪魔との戦いがクローズアップされている。けれどもその悪魔との戦いに勝利するために、人間に対する神の救いのみわざに支えられることが決定的に重要であるとする点で、『アントニオスの生涯』と『ロゴスの受肉』との主張は一貫しているのである。

4. 『アントニオスの生涯』の主題——生涯を貫く悪魔との戦いと、その勝利の秘訣

4.1 『アントニオスの生涯』における悪魔との戦いの概観

『アントニオスの生涯』を概観するならば、アントニオスの悪魔との戦いが至るところに出てきていることに気づかされる。アントニオスは資産家であった両親の死によって多くの財産を受け継いだが、それらをすべて貧しい人々に施し、修道士として町の郊外で修行の歩みを始める。そこでの悪魔との最初の戦いが、第5～7章までに物語られている。また孤独を求めて修行の場を変え、町から遠く離れた墓地へ行き、墓の中に入って戸を閉ざし、そこで修行を始めたが、悪魔はアントニオスによって自分たちの住処が占領されてしまうのではないかと恐れて、悪霊の大群と共に彼を攻撃した。そのように悪魔と再戦するアントニオスの姿が第8～10章に物語られている。さらにアントニオスは孤独を求めて山に向かい、その山にある荒れ果てた要塞に入り、戸口を閉ざしてほとんど人と会わず、そこで修行を行なった。知人たちはしばしばその要塞を訪ねたが、中に入れてもらうことはできなかったため、外で悪霊と戦うアントニオスの様子を見守った(第11～15章)。このように本書の前半部には、できるだけ孤独な状況を求めて修行場を変えていくアントニオスの姿と、まさにそのいずれの場所でも悪魔と戦い続けている彼の姿が描かれている。

本書の中盤の第16～43章には、アントニオスが修道士たちに語った長い講話が収録されている。そしてまさにその講話の大部分と言い得る第21～43章で、悪魔・悪霊への警戒と、それらと戦うよう励ます言葉が語られている。

また第49～52章ではアントニオスはさらに孤独を求め、誰にも知られていないような荒れ野の奥深くにある山のふもとで、自給自足をしながら修行を始めたことが紹介されている。ここはアントニオスがその後長きに渡り、老年に達するまで修行し続けた場所である。そしてこの場所での生活もまた、次のような言葉で要約されているのである。

それゆえアントニオスはそこに住んで、(聖書に)記されているように、血肉に対してでなく敵対する悪霊ども(エフェソの信徒への手紙第6章12節)に対して、彼がどれほど多くの格闘を耐えたかを、我々は彼のところへ入った者たちから知った⁵⁰。

さらに本書の後半でアントニオスに関するいくつかのエピソードを紹介されているが、その中にも悪霊との戦いの話が数多くある。それはアントニオスが兵士たちの司令官マルティニアノスの娘を悪霊からきよめる話(第48章)、アントニオスの仕事を邪魔する半人半獣を彼が圧倒する話(第53章)、アントニオスが舟の中で悪霊の放つ悪臭を識別する話(第63章)、アントニオスが悪霊にとりつかれた若者を癒す話(第64章)、アントニオスがある母親の娘から悪霊を追い払う話(第71章)である。

そして第89章以下には、アントニオスの生涯の終わりがどのようなものであったかが物語られている。自分がまもなく死ぬことを知ったアントニオスは、周囲の人々によって自分の遺体が神聖なものとして扱われ、埋葬されずに家屋に保存されてしまうことを恐れた。そこで信頼していた二人の修道士に頼んで、自分の遺体を他の誰も知らない場所に埋葬するように命じた。この二人に語りかける言葉こそアントニオスの遺言と言い得るものであるが、そこでも彼は次のように述べている。

たくらむ悪霊どもをあなたがたは知っており、連中がいかにも野蛮で力が弱いことを知っている。だから彼らを恐れず、

(ロゴスの受肉)における神の善性(下)——『死への腐敗』から『神を観想する生』へと導く善なる神』『キリスト教学』(立教大学キリスト教学会)第50号, 2008年, pp.67-75.

⁴⁹ Cf. 『ロゴスの受肉』第15章5節, 第19章2節, 第20章6節, 第25章5-6節, 第27章3節, 第30章5-7節, 第31章2-3節, 第32章4-6節, 第45章3節, 第46章3節, 第47章2節, 第48章3-9節, 第50章4節, 第52章3節-第53章1節, 第55章1節, 5節.

⁵⁰ 『アントニオスの生涯』第51章2節.

むしろキリストをつねに呼吸し、この方に信頼しなさい⁵¹。

このようにアントニオスは最期の時に至るまで、悪霊との戦いに心を向け続けたのである。さらにまた最終章におけるアタナシオスの結びの言葉においても、悪霊との戦いに言及されているのである。

必要があれば、異教徒たちにも読み聞かせよ。異教徒であっても、彼らも以下のことを認めるようになるためである。すなわち、我らの主イエス・キリストが神であり神の子であるということ。またそれだけでなく、主を真摯に礼拝し敬虔にこのお方を信じる者たちもまた、異教徒たるギリシア人自身が神々だと思っているところの悪霊どもを、神々にあらずとキリスト者として論駁するのだということ。またそれだけでなく、彼らキリスト者たちはそれらの悪霊どもを、人間を欺き墮落させる者だとして、我らの主キリスト・イエスにおいて踏みつけ駆逐するのだということ⁵²。

このように本書を概観するならば、その主題は明白である。すなわちアントニオスが悪魔・悪霊と戦い、勝利する姿を物語りながら、読者にも同じように戦い、勝利するように促すことを目指して本書は書かれているのである。さらに言えば、アントニオスという一人の人間の一生をそのように描きながら、悪魔との戦いこそが人間が生きる上での最も重要な課題であるとアタナシオスは主張しているのである。

このように生きて、我々はしっかりと目ざめていよう。そして、記されているように、「自分たちの心をあらゆる見張りによって守ろう」（箴言第4章23節）。というのも我々には、恐るべき抜け目ない敵として、邪悪な悪魔がいるからだ。そして使徒が語っているように、この者どもに対して「我々には闘いがある」——すなわち「血肉に対してでなく支配に対して、そして権威に対して、この闇の世界の支配者に対して、天にいる悪の諸霊に対して」（エフェソの信徒への手紙第6章12節）⁵³。

4.2 悪魔ではなく神を畏れて生きることの重要性

4.2.1. 悪魔に勝利する秘訣——恐れてはならない

このように『アントニオスの生涯』はその全体にわたってアントニオスが悪魔と戦う姿を物語っているが、その際にアントニオスが悪魔を圧倒している姿を一貫して描いている。悪魔の前でアントニオスは弱々しい姿を見せることはない。そこで強く印象付けられるのは、悪魔を決して恐れないアントニオスの姿である。

町の郊外で修行の歩みを開始した時に、悪魔は誘惑を仕掛けて、様々な欲望をアントニオスの心に呼び起こした。しかし結局悪魔はアントニオスを墮落させることができずに打ち負かされた。その際に悪魔は黒い子どもの姿で現れて自ら敗北を認めた。これに対してアントニオスは言った。

それではお前はほとんど見下げ果てた奴だ。というのも、お前は心が黒く、子どものように弱いからだ。わたしはお前に全く関心がない。主がわたしの援助者であり、そしてわたしは自分の敵を監視するからだ（詩編第118篇7節）

⁵⁴。

墓の中で修行をしていた時にも悪魔は攻撃を仕掛けたが、そこで悪魔が目論んだのはまさにアントニオスの心に恐れを呼び起こすことであった。悪魔は墓全体が振動するような大音響を立てた。また墓の四方の壁が壊れ、そこからライオン、熊、ヒョウ、牡牛、まむし、さそり、狼が入ってきて、アントニオスに今にも襲いかかろうとする幻影を見せた。けれども時々それらの獣がアントニオスに触れ、体がずきずきと痛み、うめき声を出すことはあったが、彼の心は平静を保ち続けた⁵⁵。そしてアントニオスは悪魔に次のように言い放った。

⁵¹ 『アントニオスの生涯』第91章3節。

⁵² 『アントニオスの生涯』第94章2節。

⁵³ 『アントニオスの生涯』第21章2-3節。

⁵⁴ 『アントニオスの生涯』第6章4節。

⁵⁵ Cf. 『アントニオスの生涯』第9章5-8節。

「もしお前たちの中に何がしか力があるのなら、お前たちのうちひとりだけが来ることで充分だろうに。主がお前たちを弱くなさったから、そのせいで、せめて大勢で何とかして恐れさせようとしているのだろう。獣の形をまねたことがお前たちの弱さのしるしだ」。実に今一度、彼は勇気をふるって言った、「もしお前たちに力があり、わたしに対する権威を受けているのなら、ためらわずに襲いかかれ。もしできないのなら、なぜ無意味に混乱しているのだ。我らの主への信仰は、我々にとって守りのための壁であり、証印なのだ。なぜなら我々には十字架のしるしと、我らの主に対する信仰という守りの壁がある」⁵⁶。

また本書にはアントニオス自身が悪魔を恐れることなく歩む姿が描かれているだけではない。アントニオスは仲間の修道士たちにも悪魔・悪霊と戦う際に、それらを恐れてはならないことを繰り返し教えている。例えばアントニオスが山中の荒れ果てた要塞の中に独りで入り、戸を閉ざして修行に励んだ時にことである。その要塞の中に飲み水はあったので、食物である半年分のパンを年に二度知人から屋根越しに受け取り、そこでの修行に励んでいた。知人たちはアントニオスを心配してしばしばその要塞を訪ねたが、その時にアントニオスが悪霊と激しく戦っている様子を壁越しに認識して、彼らは怖くなって叫んだ。そんな仲間たちに対するアントニオスの対応が、次のように述べられている。

彼は、悪霊どもにかまうよりむしろ、これらの人々の言うことを聞いていた。そして戸のそばへ行き、帰るよう、そして恐れないうこの人々に勧めた。つまり、悪霊どもはこわがる者たちに対してこのような幻像を成すのだ、と彼は語ったのである⁵⁷。

また修道士たちへのアントニオスの長い講話の中でも、悪魔・悪霊との戦いを主題として取り上げながら、それらを恐れる必要がないこと、またそれらに勝利するためにも恐れてはならないことを、以下に示すように繰り返して教えている。

我々は悪霊どもの策略を恐れる必要はない。というのも、祈りと断食と、主への信頼とによって、彼らはすぐ倒れるからだ。だが倒れても彼らはやめず、再び下劣かつ狡猾に向かって来る。というのも彼らは、目に見える汚い快樂によって心を欺くことができない時にはいつでも、別な仕方でも再び攻撃するからだ。そしてさらに、幻像を新たに形づくって恐れさせるふりをする——変身して、女や獣や這うものや体の大きなものや多くの兵士たちをまねることによって。しかしそうであっても、この連中のこのような幻像を怖がる必要はない。というのも、彼らは何者でもなく、もし、特に人が十字架のしるしと信仰によって自分自身を囲うならば、彼らは速やかにいなくなるからだ⁵⁸。

しかしこのようであっても、我々信じる者たちは、彼（悪霊どもの支配者、すなわち悪魔）の幻像を恐れたり彼の声を気に留めたりする必要はない⁵⁹。

必ずや悪霊どもは現れ、そして同じようにして再び消える——信じる者たちのうちの誰一人傷つけずに、彼らを受け入れようとしている火の似姿を自分たちと共に担いつつ。だからこの連中を恐れるのは適当でない。主の恵みによって、彼らのすべてのわざは何にもならないからだ⁶⁰。

子どもたちよ、わたし自身は使徒の言葉を覚えており、自分自身に当てはめた。それはあなたがたが、修行において気弱にならず、悪魔やその悪霊どもの幻像を恐れないことを学ぶためなのだ⁶¹。

というのも、悪霊どもはやって来て、我々をどういうたぐいの者として見ようと、彼ら自身もまた我々に対して同様な者となり、彼らが我々のうちに見いだす思いに応じて、彼ら自身も幻像を同じように似せるからだ。そこで彼らは、我々が恐れかつ動揺しているのを見いだしたなら、自らすぐに泥棒のように、防備されていない場所を見つけて襲撃し

⁵⁶ 『アントニオスの生涯』第9章9-10節。

⁵⁷ 『アントニオスの生涯』第13章4節。

⁵⁸ 『アントニオスの生涯』第23章2-4節。

⁵⁹ 『アントニオスの生涯』第24章4節。

⁶⁰ 『アントニオスの生涯』第24章9節。

⁶¹ 『アントニオスの生涯』第40章6節。

てくる。そして我々が自ら考えていることを、彼らは利子つきで行なう。つまり彼らは、我々が恐れ脅えているのを見るならば、幻像や脅威によって恐怖を一層増し加え、そして哀れな魂は、彼らによってさらに苦しめられるのだ。他方彼らは、我々が主にあつて喜び、来たるべき善いものについて考えており、また主のことを思っており、そしてすべてのことが主の手の内に在り、悪霊はキリスト者に対して少しも強くないのだ、誰に対しても少しも権威を有していないのだと判断しているのを見るならば、このような思いによって守られた魂を見て、恥じて背を向ける⁶²。

4.2.2. 恐れに打ち勝たせる神の臨在のリアリティ

アントニオスはこのように自ら悪魔・悪霊を恐れることなく戦い、また自分と同じようにそれらと立ち向かうことを他の修道士たちに勧めた。アントニオスがそのように力強く悪魔・悪霊と向かい合うことができたのは、他方でそのような彼の歩みを支えてくださる神の臨在のリアリティを確信していたからである、と考えられる。実際に本書において、神の臨在のリアリティをアントニオスが大変に重んじていたことが述べられている。

また、預言者エリヤが「わたしが今日その御前に立った主は生きておられる」（列王記上第 17 章 1 節、第 18 章 15 節）と語っているのを思いめぐらしていた。というのも、アントニオスが見てとったところによれば、「今日」ということでエリヤは、過ぎた時間を測っておらず、つねに基礎を据えるかのように、心のきよい者として、また、他のいかなるものにもなく御心に従う用意のある者として——そのような者だと神に見られることが必要なのである——、自らを神に示すよう日々努めていたからである⁶³。

このようにアントニオスは生きておられる神の前に立つ生活を日ごとに大切に歩んでいた。そして神の臨在のリアリティへの確信は、本書の著者であるアタナシオス自身のものでもあった。それは例えば次のような箇所を表れている。

少なくとも、そこにいた者のうち身体を病んでいた多くの人々を、主はアントニオスを通じてお癒しになり、そして他の者たちを悪霊どもからきよめられた。また、語ることにける恵みをアントニオスにお与えになった。かくて彼は嘆き悲しむ多くの者を励まし、争っている他の者たちを友愛へと変じ、さらに付け加えて、この世にあるいかなるものをもキリストへの愛より優先しないようにと、すべての人々に語った⁶⁴。

この箇所でアタナシオスは、アントニオスが行なう一つ一つの力強いわざを、アントニオスと一体となって働いておられる主イエス・キリストのみわざとして紹介しているのである。このようにアタナシオスは、アントニオスと共に歩み、働いておられる主のリアリティを確信していた。

そんなアタナシオスが描くアントニオスは神の臨在のリアリティを絶えず重んじていたからこそ、同時に神がキリストによって悪魔・悪霊を圧倒し、完全に勝利しておられることへの確信をいつも持って生きることができたのである。

「人の住む全地をわたしは我が手によって巢を捕まえるように捕まえるだろう、そして置き去りにされた卵を取り上げるようにわたしはそれを取り上げるだろう」（イザヤ書第 10 章 14 節）。要するに悪魔と悪霊どもはこのようなことを自慢しようとし、どうにかして敬虔な者たちを欺くために、このようなことを公言するのだ。しかしこのようであっても、我々信じる者たちは、悪魔の幻像を恐れたり彼の声を気に留めたりする必要はない。というのも、彼は嘘を言い、真実なことを全然語らないからだ。ともあれ、彼は語って大胆であっても、大蛇のように救い主によって釣り針で引っぱられ、家畜のように鼻孔のまわりに端づなをつけられ、逃亡者のように鼻孔を鼻輪でしばられ、唇が腕輪で貫かれたのだ。そして彼は、我々によって嘲られるべく、主によって雀のように縛られた。悪魔自身と、彼と一緒に悪霊どもとは、我々キリスト者から踏みつけられるべく、さそりや蛇のように撃たれた。そしてこのことのしるしは、今我々が彼に逆らって身を処していることだ。つまり、海を消し去り人の住む全地をつかまえると公言するこの者が今や、見よ、あなたがたの錬成（修行）を、また、彼に逆らって語るわたしをも、妨げることができないのだ⁶⁵。

⁶² 『アントニオスの生涯』第 42 章 5-7 節。

⁶³ 『アントニオスの生涯』第 7 章 12 節。

⁶⁴ 『アントニオスの生涯』第 14 章 5-6 節。

⁶⁵ 『アントニオスの生涯』第 24 章 3-6 節。

悪魔はこのように救い主キリストに完全に打ち負かされているのであり、キリスト者はただそれらを踏み潰すだけでよいのである。そうであるとすれば悪魔の誘惑の言葉や幻影はリアリティのない、偽りのものに他ならない。逆に悪魔がキリストの支配下にあることにこそ、アントニオスは絶えずリアリティを認めて生きたのである。

したがってアントニオスの前では、悪魔は自ら敗北宣言せざるを得ない弱々しい存在に過ぎないのであり、そのような悪魔の弱音が次のように紹介されている。

「なぜ修道士たちは空しくわたしを非難するのか、また、他のすべてのキリスト者たちは非難するのか。なぜ彼らは毎時間、わたしを呪うのか」。「そもそもなぜ、お前は彼らに苦悩を与えるのだ」とわたしが言うと、悪魔は言った、「わたしではない、彼ら自身が自分たちを悩ませているのだ。何しろわたしは弱くなったのだから。『敵の剣はついに止み、そしてあなたは町々を滅ぼされた』(詩編第9篇7節)とあるのを彼らは読まなかったのか。もはやわたしは、場所も武器も町も持っていない。どこでもキリスト者たちが出てきた。さらに砂漠すら修道士たちで満たされた。彼らは自分自身を見張れ、そして空しくわたしを呪わないでくれ」⁶⁶。

このように『アントニオスの生涯』における悪魔は、キリスト者に打ち負かされているまことに弱い存在に他ならない。だからこそアントニオスは仲間の修道士たちに対して、次のような力強い勧めを語りかけることができたのである。

だから、もし悪魔自身が何もできないと告白するなら、我々は彼と彼の悪霊どもとを全く見下さねばならない。そこで、敵には、自分の犬どもと共にこのような悪だくみがある。我々とは言えば、彼らの弱さを知ったのだから、彼らを見下すことができる。この仕方では、思惟において先に落胆することのないようにしよう、また、魂において臆病なことどもを考えないようにしよう。「悪霊がやって来てわたしを覆さないだろうか。持ち上げておいて、投げ倒さないだろうか。または突然現れて、混乱に陥れないだろうか」などと言って、自分自身によって恐れを作り出すことのないようにしよう。このようなことを少しも思わないようにしよう、また、滅びる者のように悲しむことのないようにしよう。むしろ勇気を持とう、そして、救われている者としてつねに喜ぼう(テサロニケの信徒への手紙Ⅰ第5章16節を参照)。そして魂において、彼らを潰走させ無にされた主が我々と共におられるのだと思おう。そして、主が我々と共におられるのだから、敵どもは我々に何もなしえないのだと、つねに思い、心に留めていよう⁶⁷。

このようにアントニオスは、神とキリストが悪魔・悪霊に対して完全に勝利しておられるというリアリティに支えられていた。だからこそ彼はそれらを恐れることなく歩むことができたのである。

4.2.3. 畏れるべきは神

関川は『アントニオスの生涯』においてヨブ記が取り上げられているが、そこには神義論についての関心が見られないことを指摘している⁶⁸。まさにその通りで、ヨブ記を論じている時でさえ、本書の関心は神義論とは異なる別の事柄に向けられている。そしてその神義論とは別の事柄に関して、極めて興味深い議論がなされている。つまりアントニオスはヨブ記を論じながら、悪魔を恐れるのではなく神を畏れることの大切さを語っているのである。

もし、ヨブのことを思って「それではなぜ悪魔はやって来て、彼に対し何でもかんでもしたのか。そして彼から財産を剥ぎ取り、子どもたちを殺し、彼を痛ましい傷によって撃ったのか」と言う人がいるなら、このような人は、力があるのは悪魔でなく、試みのためにヨブを悪魔にお引き渡しになった神だ、ということを今一度知るべきだ⁶⁹。

悪魔にヨブを試みることをお許しになったのはまさに神であられ、したがって真実の意味でヨブを試みられたのは神ご自身であられる、アントニオスはそのように語っている。つまり悪魔がどんなに力を振り、まるで主権者のように立ち回っているように見えたとしても、すべてを支配しておられるのは神に他ならないことをアントニオスは主張する。そのようにして彼は、偽りの主権者の悪魔ではなく、真実の主権者であられる神に目を向けさせるようとするのである。そして

⁶⁶ 『アントニオスの生涯』第41章2-4節。

⁶⁷ 『アントニオスの生涯』第42章1-4節。

⁶⁸ Cf. 関川, pp.300-301, 417-418.

⁶⁹ 『アントニオスの生涯』第29章1節。

アントニオスは次のように語るのである。

そこで、神だけを畏れねばならない⁷⁰。

本書においてアントニオスは繰り返して悪魔・悪霊を恐れるべきではなく、恐れる必要がないことを語ってきた。そんな彼が同時にここで強調していることは、神以外のものを恐れる必要がなく、ただ神のみを畏れるべきである、ということなのである。

それは逆に捉えれば、神のみを畏れる心を知れば、悪魔を恐れる心に打ち勝つことができる、ということでもある。アントニオスは墓の中での悪魔との戦いに勝利した際に、その戦いで傷ついたからだを抱えて横になっていた。すると天井を見上げていたアントニオスは、光が自分の上に降り注ぎ、悪霊どもが姿を消し、体の痛みがおさまリ、墓が完全な形を取り戻すのを見て、悪魔との戦いを神が見過ごしておられたのではなく、助けを与えていてくださったことに気づいた。そして次のように述べられている。

アントニオスは御助けに気づいて多めに息をつき、苦痛から解き放たれて、現れた幻に尋ねて言った、「あなたはどこにおられたのですか。なぜ、わたしの苦しみを終わらせるために最初からおいでにならなかったのですか」。すると彼に対して声があった、「アントニオスよ、わたしはここにいた。だがお前の戦いぶりを見るために待ったのだ」⁷¹。

神はあえてアントニオスにお姿を見せることをなさらず、神が直接に手を下して悪魔を退けることをなさなかった。それは神ご自身がアントニオスの悪魔と戦う姿をご覧になりたいと思っておられたからであった。けれどもアントニオスは自分が悪魔との戦いで苦闘することをよしとしておられた神の意思を知り、なぜ神は自分への悪魔の攻撃をお許しになられたのか、と神に訴え、そこから神義論を展開するということはしない。むしろこの神の言葉を聞くと、アントニオスは起き上がって祈り、それまで以上の大きな力が体に漲るのを感じるほどに力づけられたのである⁷²。それは言い換えれば、アントニオスが悪魔の攻撃に対して彼自身が戦うことに神の意思があったことを知り、そのようにしてただ独り畏れるべき神が自分に目を注いでおられたことに心励まされる経験をしたということに他ならない。悪魔との戦いで苦闘する現実もまた、神の意思に支配され、導かれている。そのことに気づかされることによって、かえってアントニオスは自らの苦闘の現実の光景が大きく変化して見えてくる経験をしたのである。

4.3. 神からの賜物としての霊の識別

ただ神のみを畏れるからこそ悪魔を恐れるには及ばない、そう確信するアントニオスが悪魔との戦いにおいて重視したのは、さまざまな霊の働きが混在するこの世界の中で悪霊の働きを見極めること、すなわち霊を正しく識別することであった。このことについてアントニオスは次のように述べている。

だから、我々が霊を通じて、霊たちを識別する賜物を得て、彼らに関することを知りうるようになるには——彼らのうち誰が卑しさの程度が少なく、誰が他の者たちより一層卑しいのか、彼らの各々がいかなる営みについて熱心なのか、そしてどうすれば彼らの各々が覆され放り出されるか——、多くの祈りと修行が必要だ⁷³。

霊を正しく識別することができ、恐れる必要のない悪霊の働きを認識することができることは、悪霊との戦いにおいて大きな力となるとアントニオスは考えたのである。ではどうすれば霊を正しく識別することができるのか。そのための試金石となることを、アントニオスは次のように語っている。

また、もし人間として、善い者たちの幻を恐れる人々がいれば、現れる者たちは直ちに恐れを愛によって取り去る。「恐れるな」と、ガブリエルがザカリアに言い（ルカによる福音書第1章13節）、現れた天使が神の墓で女たちに言い

⁷⁰ 『アントニオスの生涯』第30章1節。

⁷¹ 『アントニオスの生涯』第10章2-3節。

⁷² Cf. 『アントニオスの生涯』第10章4節。

⁷³ 『アントニオスの生涯』第22章3節。

(マタイによる福音書第28章5節)、そして天使が羊飼いたちに福音書の中で言った(ルカによる福音書第2章10節)とおりに。というのも、それらのものに対する恐れは、魂の臆病さによるものではなく、より強いものたちの現れを認識したことによるものだからだ。聖なる者たちの幻とはこのようなものだ⁷⁴。

天使を通して神が働かれる時に、確かに人は自分を超越る存在を目の前にして恐れおののく。しかし神はその恐れをすぐさま取り除いてくださるのである。さらに次のように述べている。

だから、あなたがたがある者たちを見て恐れる時にはいつでも、もし一方で、恐れが直ちに取り去られ、その代わりに名状しがたい喜び、朗らかさ、勇気、元気回復、思念の平静さ、そしてわたしが語っておいた限りの他のことども、男らしさ、そして神への愛が生じるなら、勇気を出して祈りなさい。というのも、喜びと魂の平安とは、現前している者の聖性を示しているからだ⁷⁵。

神はただ恐れを取り除いてくださるだけではなく、人の心に喜びを与えてくださるのである。これによって人は、自分が経験した霊の働きを、それが神の霊によるものであると悟ることができるのである。

そしてまさにこれとは逆に、人の心から喜びが失われ、恐れに心が奪われてしまう時にこそ、そこに悪霊の働きが現れたと悟ることができるのである。

そして実に次のこともまた、あなたがたにとってしるしであるように。すなわち、幾人かの魂が恐れ続けている時にはいつでも、敵どもが現前しているのだ。というのも、マリアとザカリアに対して大天使ガブリエルがし、また女たちに対して墓で現れた者がしたのとは異なって、悪霊どもはこのような者たちから臆病さを取り去らないのだから。むしろ彼らは、臆病な者たちを見ればいつでも、彼らをより一層恐怖でうずくまらせるべく、諸々の幻像を増し加える。そしてそののち彼らは襲いかかり、「倒れて伏し拝め」(マタイによる福音書第4章9節)と言ってからかうのだ⁷⁶。

したがって神の霊はわたしたちを恐れの中に留めるのではなく、たちまち喜びの心へと導いてくださるが、これに対して悪霊はわたしたちを恐れの中に留め続け、さらにその恐れを増大させようとする。ここに霊を識別する決め手がある。

そして霊を識別する力も神から与えられるものであると、アントニオスは考えていた。というのもアントニオスは悪霊を追い出すことができたとしても、そこで傲慢になることを戒めて次のように述べているのである。

人は各々の修行を良く吟味し、そしてそれをまね、競い、または自分のために修正しなさい。というのも、奇跡を為すのは我々の業ではなく、救い主の業なのだから⁷⁷。

悪霊と戦い、勝利する力を人が持っているわけではなく、人を通して神の御業が行なわれることによって悪霊を追い払うことができるのであるから、人は決してそれを自らの誇りとすることはできない。そしてそれは霊の識別においても同様なのである。

わたしが言っておいたように、全く以て祈らねばならず、記されているように、どの霊をも信じるということのないようになるために(ヨハネの手紙Ⅰ第4章1節を参照)、諸々の霊を識別する賜物を受けねばならないのだ⁷⁸。

霊の識別も神から与えられる恵みの賜物に他ならない。したがってアントニオスは、悪魔との戦いがただ独り真実に畏れるべき神の力によって行なわれるものであるのと同時に、その戦うべき悪魔の働きを識別することもその神の力によって行なわれるものであると理解していたのである。

⁷⁴ 『アントニオスの生涯』第35章6-7節。

⁷⁵ 『アントニオスの生涯』第36章3-4節。

⁷⁶ 『アントニオスの生涯』第37章1-2節。

⁷⁷ 『アントニオスの生涯』第38章2節。

⁷⁸ 『アントニオスの生涯』第38章5節。

※この論文は『伝道と神学』（東京神学大学総合研究所）第7号, 2017年, pp.159-186に掲載されたものである。

1. 序論

2. 『アントニオスの生涯』の著者問題

2.1. アタナシオス著者説に対する疑義

2.2. アタナシオス著者説の真正性

3. 『アントニオスの生涯』において自らの神学を展開するアタナシオス

3.1. 『アントニオスの生涯』の虚像と実像に表されるアタナシオスの神学

3.2. 修道士の理想像——神を観想する生を生きるアントニオス

4. 『アントニオスの生涯』の主題——生涯を貫く悪魔との戦いと、その勝利の秘訣

4.1 『アントニオスの生涯』における悪魔との戦いの概観

4.2 悪魔ではなく神を恐れて生きることの重要性

4.2.1. 悪魔に勝利する秘訣——恐れてはならない

4.2.2. 恐れに打ち勝たせる神の臨在のリアリティ

4.2.3. 恐れるべきは神

4.3. 霊の識別

4.3.1. 神の霊の働きと、悪魔・悪霊の働きを識別することの重要性

4.3.2. 霊を識別する決め手

4.3.3. 神からの賜物としての霊の識別

(以上前号収載)

5. 罪の克服

5.1 天への上昇

悪魔との戦いにおいて最も重要なことは、ただ独り恐れるべき神がアントニオスの味方となっていてくださり、だからこそ悪魔を恐れることなくその戦いに勝利することができ、さらには何が悪魔・悪霊の働きであるかを識別する力を神が与えてくださる、ということであった。そうであるとするならば、そのようなお方であられる神がアントニオスを受け入れてくださるという事実こそが決定的に重要である、ということになる。

神がアントニオスを受け入れてくださるということについて、『アントニオスの生涯』第65章のエピソードは興味深いものである。アントニオス自身が味わった不思議な経験がそこに述べられている。

つまり彼（アントニオス）は、ある時食事をしようとし、祈るために第9時ごろ立ち上がって、自分が思惟において引かれていくように感じたのである。そして驚くべきことに、立ったまま、自分が自分自身の外に出るかのようであり、かつ、ある者たちによって空中へ導かれているかのようであるのを見た。それから、鋭く恐ろしい何者かたちが空中にたっていて、通り抜けないう彼を妨げようとしているのを見た。彼を導く者たちが抵抗していると、その者たちは、アントニオスが自分たちに対して負い目を負っていないかどうか、釈明を要求した。さて、彼らが彼の誕生からの釈明をまとめようとする、アントニオスを導く者たちが妨げて、彼らに言った、「彼の誕生からのことは主が拭き去られた。彼が修道士となって神に告白してからについて、釈明をすることが許されるべきだ」。そのあと、彼らは告発しても断罪することができず、彼に自由が与えられ、道は妨げのないものとなった²。

¹ 本論文は博士学位論文の一部を公表することを目的とするものである（「アタナシオス神学における神論と救済論の関係についての考察」〔2019年3月8日、東京神学大学博士（神学）（甲第3号）学位授与、主査：関川泰寛東京神学大学教授、副査：棚村重行東京神学大学名誉教授、副査：土井健司関西学院大学教授〕）。本論文は博士学位論文の3.4.『アントニオスの生涯』におけるアタナシオスの救済論にあたる内容であり、ここに掲載するために若干内容を整理したものである。

² 『アントニオスの生涯』第65章2-6節（引用は戸田聡訳『砂漠に引きこもった人々——キリスト教聖人伝選集』、教文館、2016年）を使った。ただしG.J.M.Bartelink, *Athanasios D'Alexandrie. Vie D'Antoine* [Sources Chrétiennes 400],

アタナシオスはこの出来事を、パウロが第三の天にまで引き上げられたと自ら述べている経験を引きあいに出して、紹介している³。したがって、これはアントニオスが何者かに、恐らくは神の御使いに連れられて、天へと上昇した経験に他ならない。しかしその際に、空中にいた鋭く恐ろしい何者かたちが、アントニオスが罪人であるがゆえに天に昇ることに抗議した。それに対してアントニオスを導く者は、彼の誕生以来の罪はイエス・キリストが消し去られ、修道士になって以降は罪を犯していないことを、妨げる者たちに確認させている。

このエピソードにおいてアタナシオスは、神とアントニオスとの関係を問う際の重要な問題を取り上げている。その問題とは、アントニオスの罪である。つまり罪を持ったままでは、アントニオスは神に受け入れていただくことができない。しかし彼は誕生以来の罪を主に消していただき、また修道士になった後は自ら罪に勝つ歩みを重ねてきたことを明示することによって、神への上昇を妨害する者を退けることができたのである。

このことは、本書の主題である悪魔との戦いとも密接に関係していると思われる。つまり、本書において真実に恐れるべき存在は悪魔ではなく、ただ神お独りだけであると述べられており、さらに神こそが悪魔に圧倒的な力で打ち勝っておられるリアリティが強調され、しかも人が霊の働きを正しく識別する力をも神が与えてくださると述べられている。したがって、そのような神が人の味方となっていてくださるかどうか、悪魔との戦いに勝利するためには決定的な事柄なのであり、同時に神との関係を損なう自らの罪を人がどのように克服するかということは極めて重要な課題なのである。

5.2.十字架のしるしが意味するもの

5.2.1. 『アントニオスの生涯』における十字架のしるし

そこで注目したいのは、本書でアントニオスが悪魔・悪霊と戦う際に「十字架のしるし」(ἡ σφραγίς, τό σημεῖον τοῦ σταυροῦ) という言葉を繰り返し用いていることである。例えば、墓所での悪魔との戦いにおいて、アントニオスは悪魔に対して次のように力強く語りかけている。

もしお前たちに力があり、わたしに対する権威を受けているのなら、ためらわずに襲いかかれ。もしできないのなら、なぜ無意味に混乱しているのだ。我らの主への信仰は、わたしたちにとって守りのための壁であり、証印なのだ。こんだが、できないなら、なんで無益に〔私を〕煩わすのだ。わたしたちには十字架のしるしと、我らの主に対する信仰という守りのための壁がある⁴。

また、要塞の中で悪霊と戦うアントニオスの様子が触れて恐れる知人たちに語りかけた彼の言葉が、次のように紹介されている。

「だからあなたがたは自分自身に十字架のしるしを施し、勇気を出して立ち去りなさい。そしてこの者どもに自分自身をからかわせなさい」。そこで彼らは、十字架のしるしで身を守りながら去っていった⁵。

また修道士たちへの講話の中でも、アントニオスは十字架のしるしについて語っている。

しかしそうであっても、この連中(悪霊ども)のこのような幻像を怖がる必要はない。というのも、彼らは何者でもなく、もし、特に人が十字架のしるしと信仰によって自分自身を囲うならば、彼らは速やかにいなくなるからだ⁶。

むしろ、自分たちと家とに十字架のしるしを施し、そして祈りなさい。そうすればあなたがたは、彼らの姿が消えるのを目の当たりにするだろう。というのも、彼らは臆病者であって、主の十字架のしるしをひどく恐れるからで、とい

Paris, 2004 を参照して一部変更した)。

³ Cf. 『アントニオスの生涯』第65章9節、コリントの信徒への手紙Ⅱ第12章2-4節。

⁴ 『アントニオスの生涯』第9章10節 (Bartelink, p.162; Εἰ δύναιθε καὶ ἐξουσίαν ἐλάβετε κατ' ἐμοῦ, μὴ μέλλετε, ἀλλ' ἐπίβητε· εἰ δὲ μὴ δύναιθε, τί μάτην ταράσσεσθε; Σφραγίς γὰρ ἡμῖν καὶ τείχος εἰς ἀσφάλειαν ἢ εἰς τὸν Κύριον ἡμῶν πίστις)。

⁵ 『アントニオスの生涯』第13章5節。

⁶ 『アントニオスの生涯』第23章3-4節。

うのは、このしるしにおいて救い主は、この連中を裸にすることによって、彼らを見せしめに懲らされたからだ⁷。

さらに、アントニオスを知恵比べで打ち負かそうとした二人の哲学者との対話の中で、次のように述べている。

また、あなたがたは雄弁によってキリストの教えを邪魔できず、わたしたちはたとえば、十字架につけられたキリストの名を唱えて、あなたがたが神々として恐れている悪霊どもを皆追い払う。そして十字架のしるしが現れるところでは、魔術は弱く、妖術は働かない⁸。

その他にも悪霊との戦いにおいて、十字架のしるしが力を発揮することが、『アントニオスの生涯』第35章2～3節、第80章4節で述べられている。

このように悪魔と戦う際に、十字架のしるしをすることがアントニオスには大きな力となっていた。では、なぜそのような力を十字架のしるしは持っていたのか。『アントニオスの生涯』の中には、その理由が説明されていない。ただ気づかされるは、十字架のしるしと並行して、「信仰」⁹、あるいは「主に対する信仰」¹⁰という言葉が述べられていることである。アントニオスはただまじないのように十字架のしるしを行なうのではなく、十字架に死なれた主に対する信仰を心に抱きながら十字架のしるしを行っていたのである。そうであれば、そこで十字架に死なれた主に対する信仰がどのようなものかを問う必要がある。

5.2.2. 『ロゴスの受肉』における十字架のしるし

アタナシオスの救済論の著作の代表的なものであり、十字架の贖罪の意味を集中的に論じている『ロゴスの受肉』の中で、アタナシオスは十字架のしるしという言葉が頻繁に用いている。注目すべきは『アントニオスの生涯』と同様に、「信仰」という言葉との並行が見られることである。

実に、死が滅ぼされたこと、十字架は死に対する勝利であったこと、もはや死は力を発揮することはなく、真に死は死んだことの無視しがたいしるしと明らかな証拠は、キリストのすべての弟子たちのあいだでは死が意に介されておらず、皆が死を踏み越えており、もはや死を恐れておらず、むしろ十字架のしるしとキリストへの信仰によって、死を死んだものとして踏みにじっていることなのである¹¹。

しかし、十字架のしるしとキリストへの信仰によって死が踏みにじられるのであれば、真理によって裁く者にとって次のことは明らかにである。すなわち、死に対して勝利の記念碑を掲げ、勝利を立証し、死を無力にしうる者は、キリストその方をおいて他にはないのである¹²。

このように「十字架のしるし」と「キリストへの信仰」という言葉が並行する例は、他にも『ロゴスの受肉』第29章4節、第50章5節にも見られる。

では『ロゴスの受肉』において、十字架のしるしという言葉にはどのような意味があるのか。まず『アントニオスの生涯』に見られたように、十字架のしるしが悪霊を退ける力を持つ、という意味で『ロゴスの受肉』の中で論じられている事例がいくつかある。それは『ロゴスの受肉』第31章2節、第47章2節、第48章3節、第55章1節である。これに対して、直前に紹介した『ロゴスの受肉』第27章1節、第29章1節では、十字架のしるしには死に打ち勝つ力があると述べられていた。他の箇所でも十字架のしるしが死への勝利をもたらすものとして、次のように述べられている。

⁷ 『アントニオスの生涯』第35章2-3節。

⁸ 『アントニオスの生涯』第78章4-5節。

⁹ Cf. 『アントニオスの生涯』第23章4節。

¹⁰ Cf. 『アントニオスの生涯』第9章10節。

¹¹ 『ロゴスの受肉』第27章1節（引用は小高訳 [上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成2 盛期ギリシア教父』平凡社、1992年] を使った。ただし R.W.Thomson, *Athanasius. Contra Gentes and De Incarnatione* [Oxford Early Christian Text], Oxford, 1971 と E.P.Meijering, *Athanasius, De Incarnatione Verbi: Einleitung, Übersetzung, Kommentar*, Amsterdam, 1989 と C.Kannengiesser, *Athanasios D'Alexandrie. Sur l'incarnation du Verbe* [Sources Chrétiennes 199], Paris, 2000 を参照して一部変更した）。

¹² 『ロゴスの受肉』第29章1節。

彼らの一人ひとりに死に対する勝利をもたらし与えるのもキリストであり、キリストへの信仰を持ち、十字架のしるしを帯びている彼ら一人ひとりの内において死を無力なものとしているのもキリストである¹³。

ここから読み取ることができよう、十字架のしるしにはキリストが死に対する勝利を与え、死を無力なものとしてくださるという信仰が込められているのである。ただし、これらと同じような意味で用いられているが、微妙な言葉遣いの違いも見られる箇所がある。

この方は、終わりの時にすべての者の救いのために肉体をとられ、全地に父について教え、死を滅ぼし、ご自分の肉体を復活の初穂として立ち上がらせ、その肉体を十字架のしるしによる死とその腐敗に対する勝利の記念碑として掲げたことで、復活の約束によってすべての者に不滅を授けられたのである¹⁴。

ここでは、十字架のしるしが単に死に対する勝利を表すと述べられているのではなく、死と死の腐敗に対する勝利の記念碑と述べられている。「死の腐敗」という言葉は、『ロゴスの受肉』においてはある含蓄が込められている。例えば、次のような興味深い記述がある。

「死んで滅びるであろう」とは、単に死んでしまうだけでなく、死の腐敗の内にとどまることを言う以外の何であろう¹⁵。

死の腐敗とは、単に人間が死んでしまうことではなく、死へと向かって腐敗していく状態にとどまっていることである、とアタナシオスは考えている。この死へと向かって腐敗していく状態にとどまる人間の姿を、アタナシオスはさらに次のように述べている。

このことが起きて以来、人々は死に、以後、腐敗が人々に対する力を得、人類全体に対して本性に即する以上の力を発揮し、戒めの違犯に関する神の威嚇以上の力を彼らに及ぼすようになってしまった。その罪科において、人々はとどまることを知らず、わずかに第一歩を踏み出しただけで、あらゆる限度を越えるまでになってしまった。初めに、悪を見出した者となって以来、自分たちの許に死と腐敗を招き寄せたのである。以後、不義に迷い込み、あらゆる違犯を犯し尽くし、一つの悪にとどまらず、あらゆる悪を考え出し、罪に対して飽くことを知らぬ者となってしまったのである¹⁶。

このように、死への腐敗に捉えられた人間はあらゆる罪と悪を犯し尽くしていくのだと述べ、これに続けてアタナシオスは人間の犯している罪を具体的に数え上げている¹⁷。したがって、人間が神の裁きによって死に定められたというのは、単に将来死んで無へと帰ってしまうということだけを意味しているのではない。死に定められていることこそが、人間の現在の命を決定付けてしまっているのである。なぜなら人間は、死が自分の望みや願いを絶ってしまうことを知っており、そのような死の絶望に脅かされる生を今生きなければならないからである¹⁸。このようなことを踏まえるならば、十字架のしるしがただ死に対する勝利の信仰を表すものであるにとどまらず、死の腐敗、すなわち死の絶望に支配されて罪を重ねていく状況から救い出されることへの信仰をも表すものとして、アタナシオスが理解していたと考えることができる。

5.2.3.十字架の死の意味——『ロゴスの受肉』第8～9章の解釈

そこでアタナシオスが『ロゴスの受肉』の中で、十字架によってもたらされる罪からの救いをどのように捉えているかを考察する。これについてアタナシオスは、『ロゴスの受肉』第8～9章において集中して論じている。

¹³ 『ロゴスの受肉』第29章4節。

¹⁴ 『ロゴスの受肉』第32章6節。

¹⁵ 『ロゴスの受肉』第3章5節。

¹⁶ 『ロゴスの受肉』第5章2-3節。

¹⁷ Cf. 『ロゴスの受肉』第5章4-5節。

¹⁸ Cf. E.Mühlenberg, “Vérité et Bonté de Dieu : Une interprétation de *De Incarnatione*, chapitre IV, en perspective historique”, *Politique et Théologie chez Athanase D’Alexandrie*, C.Kannengiesser (éd.), Paris, 1973, p.217.

このようにして、わたしたちのすべてが死の腐敗に対して責任があったので、わたしたちの間からわたしたちと同じ肉体をとり、すべての人に代わって、その肉体を死に渡し、父に捧げたのである。ロゴスはこれを人々への愛からなしたのであるが、それは、この方の内にすべての人が死ぬことで、人々を腐敗に定める法が破棄されるためであった——その権力は主の肉体に対して使い果たされたので、もはや主に似た者となっている人々に対していかなる場も有していないのである¹⁹。

ここでアタナシオスは十字架の死の意味を、まず次のように理解している。すべての人間は、死の腐敗に対して責任があった。つまり、すべての者が神の律法に背いたために神の裁きに服さねばならなくなり、その結果として死の腐敗のもとに置かれることとなった。しかし、ロゴスであるキリストはその罪責を引き受けてくださるために、受肉され、ご自分の肉体を十字架の死に渡し、そのいのちを父なる神にお捧げになった。そのようにして、神の律法に背く者に神の裁きが課せられるという法が破棄された。

またアタナシオスは、「さらに、腐敗へと向かっていた人々を再び不滅へと引き戻すためでもあり、ご自分の死によって人々を生かして」²⁰と言葉を続ける。キリストはご自分の十字架の死によって、死に向かって腐敗の道を歩み続けている人間を「生かして (ζωοποιέω)」くださった。それは、直前の箇所とのつながりからすれば、人間の罪責をキリストが十字架で死なれることによって代わって引き受けてくださり、神の裁きを取り除いてくださったことによって人間を生かしてくださったということである。しかしそれだけではない。続けてアタナシオスは「ご自分のものとされた肉体と復活の恵みによって、火から薫を遠ざけるように、人々から死を取り去るためでもあった」²¹と述べる。つまり、ここでキリストの十字架の死と結びつけて復活の出来事を語り、キリストの復活の恵みによって人間から死が取り去られた、そのようにして人間を生かしてくださったのだ、と語っている。

このように十字架の死と復活との結びつきは、これに続く言葉にも見られる。

実に、ロゴスは、死ぬこと以外には人々の腐敗を廃する術はないこと、ご自分が父の子、ロゴスとして不死なる者として死ぬことはありえないことを考えあわせて、そのために死にうる肉体をご自分のものとしてとられたのである²²。

ロゴスが不死であり、しかもご自分の死が人間の救いのために必要であるからこそ、死ぬことができる肉体を取られた、とアタナシオスはここで述べている。ではなぜ、不死であるロゴスが肉体をご自分のものとなさってまで、死ぬ必要があったのか。

それは、万物の上にあるロゴスにあずかったその肉体が、すべての人に代わって死ぬことができ、しかもその中に住んでいるロゴスのおかげで不滅のものであり続け、以後、復活の恵みによってすべての人の内で腐敗がやむようにするためであった。そのために、あらゆる汚れを免れた犠牲、供え物として、自らご自分のものとしてとられた肉体を死に捧げ、相応の供え物を捧げることで、この方に似た者となったすべての人から死を取り去ったのである。実に、万物を超える神のロゴスであられるこの方が、まさにご自分の神殿、身体的な道具をすべての人のための代償として捧げて、死に対する負債を返済して下さったのである。そして、すべての人と同じような肉体によって彼らと共にあるものとして、神の不滅の子が、復活の約束によって、まさに不滅をことごとくまわせたのである。実に、死の内に働く腐敗そのものは、一個の肉体をもって人々の内に住まわれたロゴスのおかげで、もはや人々の許にいかなる場も持たないのである²³。

ここでアタナシオスは先ほども取り上げたように、ロゴスの十字架の死が「あらゆる汚れを免れた犠牲、供え物として」の死であり、ご自分の肉体を「すべての人のための代償として捧げて、死に対する負債を返済して下さった」と述べている。同時にそれと重ねあわせて、もう一つの受肉の意味をここで展開している。つまり死に向かう肉体に不滅のロゴスが住んでくださり、さらに復活の恵みによって、すべての人間の腐敗がやみ、不滅をまわせてくださったのである。

¹⁹ 『ロゴスの受肉』第8章4節。

²⁰ *Ibid.*

²¹ *Ibid.*

²² 『ロゴスの受肉』第9章1節。

²³ 『ロゴスの受肉』第9章1-2節。

5.2.4.悪魔との戦いにおける十字架のしるしの力

このような『ロゴスの受肉』における十字架の死がもたらす人間の救いの理解、つまりキリストの十字架の死によって人間の罪責が取り除かれ、神に受け入れていただき、しかも死への腐敗から不滅の生へと導き入れられるという理解は、本書で十字架のしるしについて言及される時にも、当然そこに含蓄されていると考えられる。そしてそのような十字架のしるしの持つ意味は、同じくアタナシオスの著作であり、『ロゴスの受肉』と同じように「キリストへの信仰」と並行させてこの言葉を用いている『アントニオスの生涯』においても含蓄されていると考えられるのである。

したがって、アントニオスが悪魔との戦いにおいて十字架のしるしを行なう時に、キリストの十字架の死によって自分の罪責が取り除かれ、圧倒的な力で悪魔を打ち負かしておられる神が自分を受け入れてくださることを心に刻んでいただと思われる。しかも十字架のしるしは、アントニオスが自ら死への腐敗から解放されていることを信じ、死を恐れず、絶望のために罪を犯すことなく、悪魔と戦い続けるための力となったのである。

6.人間の救いに対する神の主権性

6.1.『アントニオスの生涯』における救済論の固有性

以上で見てきたように、『アントニオスの生涯』には『ロゴスの受肉』と重なる救済論が機能している。アントニオスは悪魔との戦いにおいて、悪魔に圧倒的な力で勝利しておられる神とイエス・キリストの救いのみわざを、十字架のしるしを行なうことによって心に刻み、悪魔を恐れることなく、ただ独り恐れるべき神に受け入れていただいていると信じて戦った。そのようなアントニオスを支えていたキリストの十字架による救いの内容は、まさに『ロゴスの受肉』で言い表されているものに他ならない。

そんな『アントニオスの生涯』の救済論の特質を明確にする上で、『ロゴスの受肉』との違いとして注目すべきことは、前述したように『アントニオスの生涯』において神の救いを必要としている人間の現実を悪魔との戦いの歩みとして捉え、そのことに集中して論じていることである。『ロゴスの受肉』にも人間の悪魔との戦いが触れられているが、その主題が前面に出てきているわけではない。むしろ『ロゴスの受肉』においては、受肉がどのような仕方人間を死への腐敗から神を観想する生へと至らしめる出来事となったのかということを、特に受肉なされたロゴスの十字架の死と復活のみわざに焦点を当てて精緻に論じている。

これほどまでに悪魔との戦いを強調する『アントニオスの生涯』における救済論は、どのような固有性を持っているのか。L・ブイエはキリスト教史における神秘思想を概観する著作を書き、その中で『アントニオスの生涯』に表現されている神秘思想を紹介しているが、その中で次のように述べている。

これらすべてのことがその内容は明らかに聖書的・福音的であるが、やはり単なる神話のように見えるというのであれば、その外見の下に隠された深い心理的現実と、その現実が与える意味とに注目すればよい。ここで述べられている修徳修行者たちは、福音書記者たちに倣い、もちろんキリスト自身に倣って次のことを認めていた。すなわち孤独のみが人間の抱えているあらゆる暗い力を発見させ、したがってそれに立ち向かわせるということである。独りでいることができない人は、人間の心の底には自分で解くことも触れることもできないと感じる葛藤があることを認めることのできない（暗に認めようと欲しない）人である。孤独は恐ろしい試練である、なぜならそれは、われわれの表面的な安全のメッキを消し飛ばしてしまうからである。それはわれわれすべてが自分の内に抱えている未知の深淵を暴いてみせる。しかも、今考察した伝承からすれば、この深淵には悪魔が出没することをも暴いてみせる。つまり孤独によってわれわれが見出すのは、われわれ自身にも知られていない魂の深みのみではなく、そこに潜んでいる暗い支配力、それをはつきり意識しない限りわれわれがついにその奴隷としてとどまる暗い支配力である。事実この意識は、信仰の光によって照らされなければ、われわれを押し潰すであろう。ただキリストのみがこの「邪悪の秘義」を支障なくわれわれに開いてみせることができる。なぜならキリストだけが、かつてわれわれのために、今われわれの内において、それに立ち向かって勝利することができるからである²⁴。

ブイエは悪魔との戦いを積極的に論じる本書が現代人にどのような意味を持つかを問いながら、人間がその心の奥深く

²⁴ ブイエ『キリスト教神秘思想史 第1巻 教父と東方の霊性』（大森正樹、長戸路信行、中村弓子、宮本久雄、渡辺秀訳）平凡社、1996年、p.234 (Bouyer, *Histoire de la spiritualité chrétienne tome I : La spiritualité du Nouveau Testament et des Pères*, Paris, 1960) .

に抱えている問題を迫及した時に、人間にはどうすることもできない未知の深遠があるのではないかと問う。そしてまさに『アントニオスの生涯』がその深淵に働きかける悪魔の存在を語っていることを指摘する。つまり人間の心の深いところには、その心に内在してはいるが自覚できていない魂の深みがあるだけではなく、人間の力では太刀打ちできず、人間を隷属させる暗い支配力があるのであり、まさにその暗い支配力を『アントニオスの生涯』は悪魔として描いているのだと述べている。このブイエの指摘は、そのまま『アントニオスの生涯』が集中して悪魔との戦いを論じていることに込められている神学的な意義を示している。アントニオスが戦ったのは、自分の中に内在しており、それだけに自分の力で克服すべき弱さなどというものでは決してない。自分を押さえつける闇の力に支配されているからこそ、いかなる意味においても自分の力で克服できない人間の現実を、悪魔との戦いを描きながら表現し、しかもキリストこそがただ独りその悪魔との戦いに立ち向かって勝利することができることを力強く語っている。このような仕方でも描く人間の救済における神とキリストの主権性が、本書の救済論において際立っている。

『ロゴスの受肉』においても人間の救済に対する神の主権性が強調されている。しかしそこでは、神の律法に背いた人間を神がお裁きになることが神の真実性のゆえに貫かれなければならない、他方で神が創造なさった人間が滅んでしまうなら神の善性が損なわれてしまうというディレンマを前にして、一方で神の裁きが貫かれ、他方で人間が滅びを免れる道として神がロゴスを受肉させた、と論じられていた。したがって人間の救済の動機が何よりも神の真実性と善性が貫かれることにあることに、救済を導く神の主権性を見た²⁵。これに対して『アントニオスの生涯』では、人間が自分で自分を救うことのできない現実を、悪魔を描くことで明確化して、しかもその悪魔に決定的な勝利を収めておられる神の主権性の中で人間に与えられている救いの確かさを言い表しているのである。

6.2. 神の主権性に支えられた罪と戦う生活

6.2.1. 罪と向きあわせる神の主権性

このように人間の救いは、悪魔との戦いにおける主権者であられる神によって支えられている。そしてこのことが『アントニオスの生涯』の中で、真実に罪と向きあおうとするアントニオスの姿勢と深く関わっていると思われる。

例えば前述した霊の識別に関して、本書では悪霊はそれと識別できるわかりやすい姿で活動するだけではなく、教会の中で信徒の姿をして働きかけることがある、と述べている。

彼らは狡猾で、自分の形を何にでも変える用意がある。少なくとも彼らはしばしば、姿を現さずに歌を以て詩編を唱えるふりをして、聖書からの章句を想起させる。わたしたちが暗唱をしている時、すぐにこだまのように彼らが自らしばしば、まさに暗唱されたこれらのことを言う、ということもしばしばある。また彼らはしばしば、眠っているわたしたちを祈りのために起こす。そして、わたしたちに眠ることをほとんど許さないようにするべく、彼らは絶えずこうする。彼らが、自らを修道者の姿にして、この似た姿によって欺くべく、そしてさらに、自分たちが欺いた場合にその欺いた者たちを彼らの欲するところへ引っ張っていくために、あたかも敬虔な者のように語るふりをする、ということもある²⁶。

このように神を信じていると思われる者の中にも悪霊の働きがあるとの指摘は、教会の姿を鋭く問うものであると言える。この言葉は、アタナシオスが論争していたアレイオス派を指すものと解釈することができると考えられてしまいそうだが、この箇所のコンテキストではアレイオス派を示す言葉は全く見られない。むしろここでは、アントニオスが自分や仲間の修道士たちの中においても悪霊の働きを担ってしまう罪の現実があることを正直に認めている姿を、アタナシオスが描いて見せていると理解するのが自然であろう。そしてそのように徹底して自らの罪と向きあうことができるのは、人間の救いが自分の力によらず、徹底して神の主権性に支えられるとの信頼に支えられているからではないかと考えられる。

6.2.2. 罪と戦う生活の実践を促すアントニオス

本書においてアントニオスはこのように自分たちの罪と率直に向かいあうからこそ、罪を犯さない歩みをどのように具体的にこなせばよいかという極めて実践的なアドバイスを修道士たちに積極的に行なったのである。

²⁵ Cf. 拙稿「なぜ人間は悔い改めによってでは救われないのか—アタナシオス『言(ロゴス)の受肉』第7章の解釈」『パトリスティカ—教父研究』第15号、2011年、pp.6-24.

²⁶ 『アントニオスの生涯』第25章1-3節。

気弱にならないでいるために、「わたしは日々死んでいる」(コリントの信徒への手紙Ⅰ第15章31節)という使徒の言葉を学ぶのは良いことだ。というのも、わたしたちも日々死ぬ者として生きるならば、罪を犯さないだろうから。このようなことが言われるのは、わたしたちが、日々起きてから、自分が夜まで生き残ってはいないのだと思うためであり、また、寝ようとする時、自分がもう二度と起きないのだと思うためなのだ——もともとわたしたちの生自体、不確かなものであり、日々摂理から測り与えられているのだから。このような状態にあって日々このように生きて、わたしたちは罪を犯さず、何に対する欲望をも持たず、誰にも怒りをぶつけない、地上でたくわえない(マタイによる福音書第6章19節)。かえって、死ぬことを日々待ち設ける者のように、わたしたちは貧しく、すべての人にすべてのものを与えるだろう²⁷。

死ぬ者として生きる、つまりその日の自分の命が神の御手の中にあると信じる。そのことが自分を欲望から守り、罪を犯さない歩みに導くのだ、とのアドバイスをアントニオスは修道士たちに語りかけている。さらに別の箇所では、次のように語りかけている。

さらに、罪を犯さないことの保証のために、次のことが遵守されるべきだ。すなわち各人は、行ないと魂の動きとを、お互いに報告するかのように記録して書き記そう。そしてあなたがたは勇気を出しなさい。なぜなら、そもそも知られるのが恥ずかしければ、わたしたちは罪を犯すことをやめ、そもそも何か悪いことを思うのをやめるだろうから。というのも、罪を犯しておいて誰が、見られたいと思うだろうか。または誰が、罪を犯したあと人々の注意を免れるべく、むしろ嘘をつかないだろうか。そこで、わたしたちがお互いに監視していれば不品行をしないだろうのと同様に、わたしたちはもし、お互いに報告するかのように諸々の思念を書くなら、知られるのを恥じて、自らを諸々の汚れた思念から大いに守ることになろう。そこで、当の記録がわたしたちにとって仲間の錬成者たちの目の代わりとなるように。書くことを、あたかも見られることであるかのごとくに、恥じることによって、そもそもわたしたちが卑しいことを思わないようになるためだ²⁸。

自らの罪を他者に報告するかのように、自らの罪を点検する。そうすることによって自らの罪と向きあい、罪を犯さない歩みをするようにとアントニオスは促している。

このように罪との戦いにおける極めて実践的な勧告をアントニオスは語るのは、それだけ人間が罪を犯してしまう弱さを抱えているという現実認識があるからだと言える。しかもアントニオスはその人間の弱さを、人間の心に内在するものと単に考えていたのではなく、自分の力では触れることもできないほどに巨大な力で支配する悪魔によると考えていた。だからこそその悪魔の力の前では、どのような人間であっても、たとえ教会の信徒たちであっても罪を犯し得ると理解していた。しかしアントニオスにとってそのような現実認識は、悪魔との戦いを悲観させるものとはならなかった。なぜならまさにその悪魔に完全な仕方ですべて勝利しておられるキリストが、悪魔と戦う力を自分に与えてくださると信じていたからである。だからこそ厳しく罪の現実を見つめ、罪を克服する道を具体的に考え続けていたのである。そして何より、悪魔と戦い罪を犯さないで歩んでいく力を、主権者であられる神が与えてくださると確信していたのである。

そのようなアントニオスであったので、悪魔との戦いに際して、決して傲慢になることはなかった。本書が描くアントニオスは、悪魔との戦いに勝利した英雄としての自らの姿に酔いしれることはなく、自分自身を誇ることは決してなかった。

しかし、悪霊が倒れたとはいえ、アントニオスは以後、自分自身を顧みずなおざりにしたけではない²⁹。

そこでアントニオスは、ある点で勝利したのちに他の点で悪霊が彼を衰弱させることのないよう、より一層肉体を制し、隷属させた(コリントの信徒への手紙Ⅰ第9章27節を参照)。さらに、彼はもっと厳しいやり方に自分自身を慣れさせようと決心した³⁰。

悪魔と戦い罪に戦いに勝利したアントニオスは、ますます修行に励みながら、悪魔との戦いに備え続けた。それはアントニオスが、自分の力で悪魔との戦いに勝つことができるのではなく、自分で手に負えない悪魔の力に対して、それをさ

²⁷ 『アントニオスの生涯』第19章2-4節。

²⁸ 『アントニオスの生涯』第55章9-12節。

²⁹ 『アントニオスの生涯』第7章2節。

³⁰ 『アントニオスの生涯』第7章4節。

らに圧倒する神の主権性のみに信頼して生きていたことを表しているのである。

6.3.オリゲネスの論じる靈性修行との違い

アタナシオスの靈性論を研究しているングは、オリゲネスの『民数記第27章の説教』³¹における靈性論と『アントニオスの生涯』における靈性論とを比較し、その共通点と相違点を論じている。両書の共通点は、共に靈性の修練の旅として捉えているし、靈性が進歩していくものと理解しているし、類似の聖書の言葉を引用している。また両書は共に悪魔との継続的な戦いを論じているし、絶えざる祈りと、有徳な生活と、キリストとの一致と、聖書を観想することが、悪魔の攻撃と戦う武器になるとしている³²。

しかし両書には重大な相違点がある。オリゲネスにおける靈性を修練する旅は、明確な段階を持っている。これに対してアントニオスの旅は切れ目なく続くものとして捉えられている。これは両書の神学的、宇宙論的なコンテクストの違いに由来している。つまりオリゲネスは中期プラトン主義の理解に基づいて、靈的な存在がヒエラルキーの構造を持つものと考えている。このヒエラルキーは、価値と質の異なった様々なレベルの靈的な存在によって成り立っている。したがってより高いレベルへと上昇することを目指す靈的な前進のためには、様々な段階を持つことは自然なことである。これに対して、アタナシオスは創造者と被造物とを明確に区別しているので、彼にとって両者の間の中間的な存在はないし、また神へと上昇する段階の存在を強調することはない³³。

ングは、このような靈性論の理解が真実に史的なアントニオスのものであるかはわからないが、そこにアタナシオスの神学の反映があることは確かなことである、としている³⁴。そのように本書において史的アントニオスの実像よりも、アタナシオス神学の反映に注目する姿勢は、すでに指摘した関川の理解と同様である³⁵。そしてングは、アタナシオスが『アントニオスの生涯』を通して成し遂げたことは、オリゲネスに代表される伝統的なアレクサンドレイアの神学と宇宙論のコンテクストを、ニカイア正統主義の信仰、すなわちキリストの完全な神性に究極的な関心を置く信仰に適合する新しいコンテクストに変換して靈性論を論じたことである、と結論づける³⁶。

ングが靈性論という言葉で捉えているものと、筆者が救済論という言葉で捉えているものの内容は重なりあっている。すなわち人間の靈性の成長の基礎には神の主権性に基づく救済の働きがある、という理解が『アントニオスの生涯』において展開されていることを、本章では論じてきたのである。そしてまさにそのような『アントニオスの生涯』の救済論も、オリゲネスに見られる中期プラトン主義的な霊肉二元論ではなく、神と被造物（人間、悪魔、悪霊）との間の二区分にこそ基礎を置いて展開されてきた。『アントニオスの生涯』における人間の救済における神の主権性の強調は、神と被造物との明確な存在論的区別を重んじるアタナシオスの神学の反映に他ならないのである。

7. 結論

『アントニオスの生涯』の著者は伝統的にアタナシオスであると考えられてきたが、近年この点に関して疑義が呈せられた。しかしこの問題について研究者の間で議論が重ねられた結果、本書は紛れもなくアタナシオスによる著作であることが明らかになった。また同時に本書には、著者であるアタナシオス自身の神学が色濃く反映されている。

アタナシオスはアントニオスという一人の人間の生涯を描きながら、悪魔との戦いこそが人間が生きる上での最も重要な課題であることを明示し、本書においてまさにその悪魔との戦いに勝利する秘訣を述べる。その秘訣とは、悪魔を恐れるべきではないこと、また悪魔への恐れに打ち勝たせる神の臨在のリアリティ、神とキリストが悪魔・悪霊に対して完全に勝利しておられるというリアリティを重んじて生きること、さらに神ただお独りをこそ恐れて生きることである。したがってただ独り恐れるべき神の霊の働きと、恐れてはならない悪魔・悪霊の働きを正しく識別することが極めて重要である。神はご自分を恐れる者をいつまでもその恐れの中に留め続けることはなさらず、その恐れを取り除いてくださり、さらにはその人の心に喜びを与えてくださる。これとは逆に、悪霊は人の心から喜びを取り去り、恐れによってその心を支配しようとするのである。このような事態をよくわきまえておくことこそ、霊を正しく識別する決め手である。他方で本

³¹ Cf. J.P.Migne, *Origenes, Homiliae in Numeros 27 (Patrologiae Cursus Completus, Series Graeca 12)*, Pari, 1857, col.780-801.

³² Cf. N.K.K.Ng, *The Spirituality of Athanasius: A Key for Proper Understanding of this Important Church Father*, Bern, 2001, pp.268.

³³ Cf. *ibid.*

³⁴ Cf. *ibid.*, pp.269.

³⁵ Cf. 関川泰寛『アタナシオス神学の研究』教文館, 2006年, pp.300-301, 417-418.

³⁶ Cf. Ng, pp.269.

書は、そのように霊を識別する力も神から与えられる恵みの賜物に他ならないことを強調する。

このように悪魔との戦いにおいて最も重要なことは、ただ独り恐れるべき神が人間の味方となっていてくださることであつた。したがって当然問われるべきは、神がその人とどのような関係にあるかということであり、神との関係を損なう自らの罪をどのように克服するかということなのである。そこで注目すべきは『アントニオスの生涯』で繰り返し用いられている「十字架のしるし」という言葉である。この言葉に含蓄されている意味を明らかにするために、十字架の贖罪の意味を集中的に論じている『ロゴスの受肉』の中で、この言葉がどのような意味で用いられているかを明らかにする必要がある。『ロゴスの受肉』では、キリストの十字架の死によって人間の罪責が取り除かれ、神に受け入れていただき、しかも死への腐敗から不滅の生へと導き入れられるという理解が展開されている。このような理解は、『ロゴスの受肉』だけではなく『アントニオスの生涯』において「十字架のしるし」という言葉が用いている場合にも、当然著者であるアタナシオスの念頭にあつた。すなわちアントニオスが悪魔との戦いにおいて十字架のしるしを行なう時に、キリストの十字架の死によって自分の罪責が取り除かれ、圧倒的な力で悪魔を打ち負かしておられる神が自分を受け入れ、味方となっていてくださることを心に刻んでいたのである。

そのような『アントニオスの生涯』の救済論の特質を明確にする上で、『ロゴスの受肉』との違いとして注目すべきことは、『アントニオスの生涯』において神の救いを必要としている人間の現実を悪魔との戦いの歩みとして捉え、そのことに集中して論じていることである。これほどまでに悪魔との戦いを強調する『アントニオスの生涯』における救済論は、どのような固有性を持っているのか。アントニオスが戦ったのは、自分の中に内在しており、それだけに自分の力で克服すべき弱さなどというものでは決してない。そうではなく闇の力に支配されているからこそ、人間はいかなる意味においてもそのような状況を自分の力で克服できない。『アントニオスの生涯』では悪魔との戦いを描きながらそのような人間の現実を表現し、しかもキリストこそがただ独りその悪魔との戦いに立ち向かって勝利することができることを力強く語っている。このような仕方では人間の救済における神とキリストの主権性が、本書の救済論において際立っているのである。そして本書においては人間の救いが自分の力によらず、徹底して神の主権性に支えられるとの信頼に支えられているので、同時に徹底して人間の罪の現実と向きあう姿勢が見られるのである。このような『アントニオスの生涯』の救済論は、オリゲネスに見られる中期プラトン主義的な霊肉二元論ではなく、神と被造物（人間、悪魔、悪霊）との間の二区分にこそ基礎を置いて展開されてきたものと言える。『アントニオスの生涯』における人間の救済における神の主権性の強調は、神と被造物との明確な存在論的区別を重んじるアタナシオスの神学の反映に他ならないのである。

※この論文は『伝道と神学』（東京神学大学総合研究所）第8号、2018年、pp.201-223に掲載されたものである。